

新年は阿彌陀也

阿彌陀は芽出たき極

お芽出たい新年に因んで、一番お芽出たいお話をしてみませう。
世の中に何が芽出たいといつても、千代に八千代に萬代までも盡き
ない壽命即ち無量壽、梵語でいへば阿彌陀でありますが、この阿彌陀ぐ
らゐお芽出たいことはないのです。佛も「命寶第一」と仰せら
れて、お互ひ生命ほど大切なものはありません。生命は實に人の根本的
願望であります。併し世の中には、胎内で死んで生れる人もあれば、生

後間もなく死ぬる人もあります。人生七十年は古來稀れなりで六十歳以
上生きる人さへ少い。若い人ほど餘計に死ぬることが統計にあらはれ、
日本人の平均壽命は卅歳を出でないといふ事でもあります。生者必滅、無
常遷流は、他事ではありません。この無常の世の中にあつて、南無阿彌
陀佛ぐらゐお芽出たいことはありません。それは無量の壽命ある靈格に
歸依一致するからであります。新年に南無阿彌陀佛と唱ふる、人生この
位お芽出たいことはありません。むづかしくいへば、新春に稱名する
人生の至慶、之に過ぐるものあらんやであります。

南無阿彌陀佛とは梵語で、南無は歸命す、生命を捧げて歸依し奉る
の意、阿彌陀は無量壽、無量光の意、佛は覺者、慈悲智慧圓滿の者、三

界の主師親の義、即ち吾等の生命の根源に歸入して、盡させぬ壽命を得ることが、出来るのであります。

念佛即ち不老長壽の法

ひかし支那の曇鸞大師は、大集經六十卷の註釋を志されて、中途に病氣にかゝられ、「釋尊一代の説法、その義深遠にして、經論の數また極めて多し。普く之を學び、之が註釋を施さんには、短命にては及び難し先づ不老神仙の法を習得して、然る後、佛典の註釋を作らばや」と、陶弘景といふ道士に就いて、その方術を學ばれ、仙經十卷を受けました。けれども此歸途、菩提流支三藏といふ聖僧に逢ひ給ひ、「佛法中若し長生

不死の法、此土の仙經に勝るものあるか」と、流支に問はれた。流支は地に唾されて、「これ何の言ぞや、相比すべきものにあらざるなり」と「佛說觀無量壽經」を授けられ、「汝これを誦すべし、これ大仙の方なり。これによりて修行せば、まさに生死を解脱することを得るなり」とよつて大師は折角得た仙經を燒き捨て、それよりずつと優れる念佛門に歸せられた。

阿彌陀は永久平和也

洵は念佛は、無量壽、不老長生を得る要道であります。一方よりいへば、釋尊一代の教説は、全く念佛にあるともいへます。「爲得大利」、「無

上功德」とも嘆ぜられたのも、所以あることであります。私共浄土門よりいへば、この念佛によつてのみ、永久平和の基礎が築かれ、眞善美の理想が現實化されるのであります。それ故に新年初頭には、先づ最初に南無阿彌陀佛、歸命無量壽如來と稱へなさいと申すのであります。

新春清話

若水を汲むころ

湯あがりの氣分と、借金を返したときの氣分、これほどさばくした軽い氣持はありません。襟垢に汚れた肩の張る綿入を脱いで、裕に衣更へた朝の氣分、これが初空のほのくと明け初むる、うす朗かな元朝に若水を汲みあげて、顔を洗つた刹那の氣持であります。

元日や神代のことと思はるゝ

守武

如何にも何處ともなく新彩に装はれた、萬象悉く改まつた姿に、新年

を祝ぐ意味もあり、又宗教的に味ふべき意義も、あるのではありますまいか。

相當に怠け癖のついた學生でも、學年が進んで始めて、新しい教室に入つたときは、この學年こそは、何としても奮發して、一つ大に勉強しようと思へます。これは物事が改まつたときに、誰れもの頭に動くところの、殆ど共通した意志であります。大晦日の銀座で、日記を買つて歸るほどの人に、元日の日記を書き綴らぬ人はありません。交際費を遣ひ過ぎた若夫婦が、七草まで位は、毎晩きつと小遣帳を附けて居る。少くとも改年初頭の心理状態は、かうしたものであります。生活の改善、世渡りの革新、さてこれが何時まで續くことか、問題であります。

「殆ど凡ての人にとつて、矯正するといふことは、缺點を變態させることである」(格言集)

本當に缺點を矯正するといふことは、最もむづかしい仕事の一つであります。禁烟に努力して居る人が、甘いものを喰ひ過ぎて、腸胃をこわすなど、近い實例は幾らもあります。元日の朝のすがくしい無我の境地若水を汲ひこゝろを、如何に維持すべきか。いさゝか宗教的工夫と考察とを試みて見たいものであります。

希望への躍進

希望は彈力であります。彈き返す力であります。眞實に生きんとする

人生の發動機であります。希望が無くして、光明の生活を現前するとは出来ません。夜の野道に踏み迷ひ、行き暮れた旅人が、草屋洩る一道の燈火を見出したときの喜びや、どうでありませう。ひかり、光明は即ち希望であります。我等の生活に於ける惡癖とか缺點とかいふものには、先天的に生れついた性質といふやうなものもあれば、また後天的に家庭の事情とか、周囲の環境とかいふものに支配せられ左右せられて、癖づけられたものもあります。併しその多くは、希望なき生活に對する不平と不満とに支配せられ、左右せられて、癖づけられたものであります。美しい輝いた正月は、平和なる新春には相違ありませんが、一面工場町に續く棟割長屋の路次の奥には、愛する子供たちの爲めに、

一碗の雑煮餅すら、祝ひ得ぬ、失業者の群があります。此等の人々の前には、正月も大晦日もあつたものではありません。唯々如何にして當面の空腹を凌がんとするかの問題が、横たはつて居るのみであります。此の一大事實に直面して、徒に之を因果律の佛説に一任し、手を空しくして冷然看過し去ることは餘りに没人情であります。日本國は日本人全體が皇祖より承け繼いだ日本國であります。個人生活の改善と、社會状態の改良とは、まさに國民一致の自覺と協力とに待ちて、明るい道程への歩を進めねばなりません。社會事業とは、國民的自覺に出發する廣義の生活改善であるともいつて宜しい。即ち希望への躍進であります。

自他不二の愛

「慈善を行へ！損はしないぞ」と、ブライ・セーンは皮肉つて居ますが、報酬を豫期する行爲には、價値がない。他人の爲めに慈善をするのだ。他人の爲めに働くのだといふ意志に出發するから、自然報酬を豫期する考へも出て來ます。細胞組織に成立つて居る此の世の中に、全然自分に交渉を持たない他人といふものが、存在する道理はありません。社會が富んで來ることは、自分が富んで來ることでもあります。自分が富むことは、社會の富を増進することであるといふ根本思想を味ひ得るといふことが詮要であります。人類愛に立脚して、自分と他人といふものを、別

別に見ないのが、佛教の本義であります。平和の礎石は、何處までも、此の思想の上に築かれねばなりません。「汝平和を欲するか、然らば正義を耕せよ」と絶叫したアルバルト・トマーは、常にこんな意味のことをいつて居るではありませんか。

「自分のことよりは、他人のことを心配して、自分のことを念頭に置くなよ。その内に思ひ掛けなく報いられたとき、人間といふものが社會といふものを、非常に有り難く感ずるやうになるぞ。」

かくて彼れは、今や世界に殆ど、宗教的信頼に等しい何百萬の崇拜者を持つて居ますが、これは佛教の無所得の行爲から來た、不求自得の益を説いたものに過ぎません。而も彼れの主張は、實動的思潮となつて、將

に世界を動さうとして居ります。又世界的哲人である、偉大なるガンジ
ーが、印度に於て盛に、佛教思想の復興を提唱し、慈悲、平等、解脱の
佛教を以て、世界を救はうとする運動を起しつゝあるとこのことでありま
す。

春陽のよろこび

新春の厄除大師詣、川崎大師の恵方参りに、麥細工の虎を見ると、し
まりなしに首を振つて居ります。動物園の虎も、一刻もじつとして居ま
せん。寅年の虎は、活動の象徴であります。佛教國民が世界的活動の
幕を切るべき使命を暗示されて居るかも知れません。吹き渡る朝東風は

何處ともなく春の福音を漂はせて居ります。

大震火災に就き三思せよ

大震火災の觀方

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、忽焉として大地上下動、家
倒れ火出でて人畜の殺傷無數、東京府外四縣の慘狀を追想するときは、何
人も忘れようして忘れることは出来ない。文化の紹復、帝都の復興、容
易のことではない。且く三思を以て記念標語となし、お互ひ大に警戒
注意する所なくてはなりません。取りも直さず、

一には此の大震火災の慘狀は、各人の過去無始劫來の妄業の所爲であ

つて、佛敎に所謂、共業所感と別業所感との二に外ありません。現に過
去の不善の原因は、現在の大震火災の結果を招きたることを觀念すると
きは、過去世より現世に及ぶ、怖るべき惡因惡果の空しからぬこと、自
業自得の道理を自覺することを思ふのであります。

二には現在の世の中に、かゝる慘狀を目のあたり見る以上は、未來に
向つて亦復如何なる結果を得るかを想見し、現在世の原因を能く能く思
ひ、未來世には必ず善果を得んことを思慮し、以て實際に善き行爲を致
したいものであります。

三には社會人道の爲めに思ふべき點は、衆生の恩、即ち一切生物の恩
惠の厚いこととであります。一たび大震火災に遭つても、その生存せる者

は、各自の奮闘努力によつて、漸く復興の氣運を得るといふことは、上には聖君あり、下に賢臣良民ありて、人事の調和が、その宜しきを得たることを思ふべきであります。

禍を轉じて福とす

以上の如く三たび之を思ふときは、必ず實行せねばならぬことの少ないのは分明のこととあります。即ち十萬人の横死を吊ふと共に、各自の修養としては、めいめい必ず罪障消滅の祈念を凝さねばなりません。かの最上無比の寶號、即ち萬徳の歸着ともいふべき南無阿彌陀佛を十遍づゝ唱へて、十萬の精靈の回向をなし、又各自の三障を消滅し、以て衆

生の恩に報すべきことを思はねばなりません。

抑々三障といふは、佛經に所謂業障と煩惱障と報障とのこととあります。關東人その他の人が、不測の大慘狀を受けたのは、人間としての果報であつて、止むなきこととありました。その原因たる、惡業をなさしむる煩惱、即ち貪、瞋、痴、慢、疑、身、邊、邪、取、戒の十煩惱の所爲でないものはありません。この煩惱に驅り使はれて、日夜、身業と口業と意業との三業の惡因をなしたる結果であると悟るときは、上、王公大臣より下、庶人に至るまで、三障の如何に怖るべきかを思慮觀念して毎年當日の記念祭として實行すべきものであります。是れ全く三世に通貫して、惡念惡業を除却し、善念善事を實行せしむる好き方便として、

他に及ぶものはありますまい。

仍て私共は、三思を以て、禍を轉じて福とするの標語となし、國民道德の淵源を實行せしめようと欲するものであります。

内鮮相携へて進まん

五人の身代り志望者

私が關東大震災三週年に、飛行機に乗つたことに就いては、大分世間を騒がせましたが、一度乗つて見たいといふのは、豫ての私の念願でありました。けれども増上寺山内でも、賛否二つに分れました。何れも私を思つてくれる誠意に變りはありません。併し今日汽車や電車に乗るのに、前以て仰々しく人に相談をするものはありません。私は最初より誰にも相談などしないで、是非日ごろ心安い片岡飛行士と、同乗飛行を

試みる決心でありましたのを、人様たちが大層心配されて、私の身代りとなつて飛行機に乗らうと言はれた方が、五名も出るといふ始末、僧侶もあれば俗人もあり、内二人は婦人でありました。その好意は誠に感謝いたすのでありますけれども、私は断然おことわりをした。萬一落ちて死んだら、十萬の震災遭難者と共に死んだと思へば宜いので、私は前から心を決めて居つたのであります。それでも何事もなく済んだのは、仕合でありました。墜ちて死んだりしようものなら、また皆様に、どんなに心配かけたかも知れません。

飛行機は愉快であつた

大震災三周年即ち大正十四年九月一日の當日、本所被服廠跡には、午前八時より莊嚴な法要が營まることとなつて居り、又横濱でも施行したので、一時に兩方をかける譯には参りませんが、飛行機なら至つて便利であります。私は當日三十五分間ほど、東京横濱一帯の上空を飛んだのであります。當日は珍しく上空の氣流も穏かなので、實に愉快でありました。後に聞いた話によりますと、私は一向、顔色なども平素と變らなかつた、かういふことは滅多にないといふことであります。そして空中から回向をいたし、震災横死者の亡靈を吊ひ、空中から散華を降したのであります。これまで素人で飛行機に同乗した人は相當あることはあるけれども、法衣を着て飛行機に乗つたのは、始めてのことでありまし

た。飛行協會の會長のやうな方でも、未だ實際自分で乗つたことはない人がある位で、長岡外史將軍なども、「一度は乗つて見る」と申して居られた。そして私にも、「これを因縁に飛行協會の顧問になつて戴きたい」などといはれて居ります。

朝鮮の土地と人を知れ

さて朝鮮佛教團では、團の事業も、幹部の方々の努力と、各方面の好意や援助とに依つて、次第に進展して參ることは、誠に仕合な次第であります。朝鮮は年と共に發達し、今日では以前に比較すると、大分進歩したることと想ひます。朝鮮の佛教と内地の佛教とは、相携へて進んで參

らんければならぬので、朝鮮各本山の人々も、今日では餘程世の中の事情を、考へられるやうになつたこととありませうし、どうか協力して、朝鮮開發の爲めに盡したいものであります。それには如何にも、朝鮮の土地と人を知らねば、一向親みが出ないものであります。私は明治三十三年に初めて朝鮮に參り、その後十四年に再び朝鮮に渡り、又大正十一年も參り海印寺や梵魚寺へも參詣しましたが、追々お馴染みの方々も出來ました。私の宗内のもので、大邱の三隅田持門といふ人は、山口縣に居つた時分の私の弟子であります。今から三十年以前に渡鮮いたし、釜山に知恩寺を開きました。各宗の朝鮮開發としても、同氏などは先驅者でありました。此の人は又日本語學校を起して、朝鮮の少年青年を教

育し、その後馬山に移つて、久しく小學校長として子弟の教育に従事し、それから大邱に移り、光明寺を建立しました。氏は古くから、朝鮮語が誠に巧みなところから、鮮人側からも、大層尊敬を受け、鮮人の開教に努力した結果、七八百人位の朝鮮人の信者を得るやうになり、年配も五十歳ぐらゐで、追々世間の信望も高まらうといふのに、遂に病歿されたのは、誠に残念なことでありました。

朝鮮復興の先驅者たれ

朝鮮佛教團の布教留學生が、追々内地に留學されるのは、誠に結構なことであります。増上寺では、大したお世話は出来ないけれども、便利

が好いから、上京されたときは、何時でも此方（増上寺）に休んで頂きたい。私は曾てその留學生達に對しても、「諸君は最初の留學生であるから、確りやつて頂きたい。唯々書物に就いて研究する學問なら、何にも東京に限らず、朝鮮でも何處でも出来るのであります。どうぞ留學の方は、よく修養に努め、立派なる人格者になつて、朝鮮復興の先驅者として、活動する丈の人物になるやうに、心懸けて頂きたい」とくれぐれも申したことであります。それで朝鮮の佛教と内地の佛教とが、しつくり固く手を握り合ひ、相提携して朝鮮開發の爲めに、努力したいものであります。そして内地留學は好いとして、將來は朝鮮にも、佛教の専門學校を建設するやうにしたら、結構であると思ふのであります。

列國の同胞と提携して

東亞佛教大會には、各宗から委員が出て、随分盛會でありました。支那からも僧侶や佛教の篤信家が参られた。無論朝鮮から、大分見えました。初めは單なる懇親會のやうなものでありますが、先づ東洋各邦が手を携へて、一緒になつて行かれるやうになりましたら、その次には、西洋人と手を握つて、共に世界人類のために、努力いたしたいものであります。

終りに大震災、第三周年供養として、當日飛行機の上から散らした所謂散華に記載した文字は、左の通りであります。

震災第三周年供養

茲に謹んで追弔飛行を行ひ、

法雲たなびくところ珍妙華を雨らして精靈の追善に擬し、以て幽魂の冥福を薦め、聊か遺族諸氏の心を慰めんと欲す。翼くは相俱に佛名を稱し、追弔の誠意を致されんことを。

南無阿彌陀佛 道重信教
南無釋迦牟尼佛 新井石禪

大正十四年九月一日

主催者 民間飛行士 片岡文三郎

同

普濟法話集刊行會

法然上人の信仰

開宗七百五十年の聖會に當り我が宗祖法然上人の信仰の一端を披瀝することは、自他共に渴望する所であります。

一體信仰は、冷煖自知と申して、信仰に入りし人のみが、其の妙味に接することが出来るので、實行門の之が第一義で、信仰の程度の冷と煖とか云ふ事は他人の説明では了解が出来ない。信仰の當事者のみが自然に解する事が出来る。信仰は論議で示すよりも一念發起實行に趨る、其處に始めて信仰の溫情に接することが出来るのであります。

支那唐の善導大師は教義を二つに分ち、第一の解義門の恵を「若欲學解」從凡至聖の文で現はし、第二の信仰門では「必籍有緣之法」少用功勞多得益の文で説明して居られる。目的は化他の大益にありますが、自己に何等の信仰もなくして、決して人を化益する事は出来ない。假ひ化益し得るとも、力強い自信力ある信仰の波に、人をして漂はすことは出来ないので、順序として自證門を先きにし化他門を後にせられたものである、これは彼の釋尊の説かれし大經にも、法藏因位を先きにし、果成の利益を後にしてあるのを見ても明瞭であります。

法然上人一代の歴史を拜するに、淨土開宗まで二十餘年の研究は、學解所謂解義門に當り、開宗以後四十餘年が信仰門の生活に相當してゐる

やうに見受けられる。

法然上人は御苦心の結果開宗の偈「一心專念彌陀名號」行住坐臥不問時節、久近念念不捨者、是名正定之業、願彼佛願故」を見出して、後從來の研究の學解を棄て、新鮮にして力強き信仰たる念佛の一に歸せられたのであります。

これ上人が自證門は充分體得せられ智慧第一の名を得、當代隨一と歌はれしも、化他門に於ては其意を得ず、かくては佛教の本義たる自己兼濟の志に悖るを以て、此の化他の一門を完全にすべく、念佛實行の法を説示された。

上人一代の信仰の經歷は勅傳に詳述されて居るが、此の簡要を記せ

しものは一枚起證文で、其文中の「只往生極樂の爲には南無阿彌陀佛と申して、疑ひなく往生するぞと思ひとりて申す外には別の仔細候はず」の一文に法然上人の眞意が含まれて居るので、之が信仰の大眼目になつて居ります。

即ち信仰は實行門にして、彼の淨土九品往生經には「四重八重五無間罪、稱名念佛、業障消滅」と説かれ、彼の先徳は、

日々に積りし罪は塵埃

南無阿彌陀佛は筈なりけり

と歌に示して居られます。

一體吾等には、果報障煩惱障業障の三障が先天的に具はつて居て、

殊に業障は次期相續で容易に除かれるものでなく、先年の大震火災の如きは一方から云へば、此の業障のなす所で、業の上より云へば業火陶然之に反して信仰は法界燈然で、業と信仰とは茲に格段の相違がある事は充分瞭然であります。

法然上人の淨土開宗は我慢勝他の爲でなく凡夫をして報土に往生せしめんが爲めであつて、其の宣傳し給ふ念佛の功德は、萬機普益である。故に念佛弘通に際しての上人の意志は實に牢固たるもので、彼の勅傳に「我たとひ死刑に處せらるゝとも此事は言はずばあるべからず」此の一語は、實に上人の生命にして堅き事金城鐵壁の比でなく、萬難を排するに死を以て誓へる念佛の信仰であります。

此極樂往生の願を起されしものは、印度に於て馬鳴、龍樹、天親、支那に於て道綽、善導、天台、日本に於て惠心、傳教、智證の諸徳を始め諸高僧碩徳多數ありますが、是皆化他の出世容易の爲に往生の願を起されたのである。

而して上人の首唱し給へる念佛は、所謂選擇集の卷頭の選擇本願の念佛にして、遠くは彌陀に起因し、善導によりて本願の念佛となり、更に上人に依りて選擇本願念佛となつて現はれたものである。

故に上人内心に於ける摯熱的信仰は、外面の肉體全身に及ぼし、全身念佛となつて現はれ、九條邸の頭光の橋の奇瑞を示し、又は眼光炯々暗夜に燈なくして聖經披閱の便を與へ、更に進みて日常用ひ給ひし事物

に及ぼし、念珠に光明赫々たるを見るに至つた。是皆念佛具徳の賜である。

これ我が宗の骨目たる「心存助給、口稱念佛」と解せらるゝ所以であります。

斯の如く法然上人の信仰は、念佛の一に歸し、其の弘通に當りては都鄙近隣は云ふに及ばず、遠くは四國邊土迄足跡を止め給ひ、且つ死を以て之を決行せられし雄心、今時世態濁々、殊に大震災の一大試練に遭逢せし吾等は、等しく上人の芳躅を拜して、念佛向上の一路に進み、上人化導の一助を求むる事は、記念法會に際して報恩の最要なるものであります。

増上寺晋山式謝辭

おもんみ 惟るに方今人心動搖し、風教頹廢し、國運の前途憂慮すべきもの少からず、職に教導の任にある者、其責務の甚だ重きものあるを覺ゆ。老納の不徳固より其器にあらずと雖、過て其選に當り、當山第七十九代の法燈を繼ぐ。今日以後一意列祖の洪範に則り、歴代傳統の本義を體し、門末道俗と共に専ら教化の事に従ひ、益國光の發揚と人類の福祉に貢獻し、以て皇恩に報答し奉らんことを期す。茲に本日晋山の式典を擧ぐるに際し

満堂諸賢來臨の光榮に接し、大檀越徳川公爵閣下の祝詞を辱うす。感激措く能はず、一言所懐を陳べ、謹んで謝意を表す

大正十二年七月八日

増上寺七十九世 道重 信教

宗祖大師七百年忌垂示

曩に宗祖明照大師七百年の、御忌を迎ふるや、忝くも明治天皇より諡號宣下の寵命を拜し、次で今上陛下勅額下賜の聖恩に浴し、皇恩祖徳の廣大なるに感激今猶新なるものあり。而して爰に開宗七百五十年の聖辰に遭逢し、前住安譽大僧正が最後十年の誠悃を傾盡して成れる新建の大殿に記念大法要を奉修すること、洵に老衲の喜びとする所なり。惟るに宗祖大師の御法語にも「受け難き人身を受け、遭ひ難き本願に遇ひ起し難き道心を起して、離れ難き輪廻の里を離れて、生れ難き淨

土に往生せん事、悦の中の悦なり」と宣へる宗祖法悦の境地を瞻仰するもの、茲に開宗記念大法要の勝縁に値遇して、愈々信心を策勵し、道念を涵養し、人心を作興し、以て皇恩祖徳に奉答せられんことを

大正十三年三月二十五日

大本山増上寺七十九世

澄譽信教

臨終の心得

人命は呼吸の間に在り

お互ひ凡夫であると、死ほど怖いものはない。毎日せつせと働くのも食事をするのも、死にたくない爲めでありませう。けれども此の怖い死魔は、いつ襲ひ來るか分りませぬ。所が多くの人、之に處する覺悟がなく、死魔襲ひ來つて、始めて大に慌て悶ゆるを常とします。凡情はいつの世も、同じやうなものであります。大聖釋尊のときにも、ある坊様が、未だ覺り切つて居りませぬので、釋尊はその坊様に、人の命は幾干

の間にあるかと問ひ給うた。坊様は數日の間でありませう。釋尊曰く、御身は未だ道を知らないと。他の坊様は曰く、飯食の間でせう。釋尊曰く、御身も未だ道を知らないと、又他の坊様は曰く、それは呼吸の間でありませうと。そこで釋尊は、「御身こそ道を知れり」と仰つたのであります。

實に私共は、いつ呼吸を引取るか分りませぬ。佛教では、壽の期限と煖の身體と、識の精神と、此の三つが揃つて居るのが生であり、この三つの離れたのが、死であります。されば私共、いよく此の三者が分離すると、此の座を動かさないで、あの世の人になるのであります。而も斯る際に覺悟がないと、その時に至つて斷末魔の苦みに堪へぬばかりか、

平素であつても落着いた仕事は出来ぬのであります。

臨終には斯る覺悟を要す

さてお互は、否やでも應でも、この嫌な死を迎へなければならぬ運命に置かれて居ることが分つたならば、如何なる用心を以て、此臨終を迎ふべきかは、必然肝要の問題であります。私の此の大切な必然の臨終問題は、之を如何に解決するかといふに、私は信仰心の振起、唱名念佛の功德に依つて、一切解決出来ると思ふものであります。「明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の吹かぬものは」今の今まで明る燈つて居た電燈の火も、電流を傳へる僅か一本の針金の故障の爲めに、或は又アン

ペラが灼熱した爲めに、ぼつと消えると同じやうに、夕餉の膳は、家内團欒、談笑の間に済ませましても、朝の膳には、冷い死骸と化し、食事を俱にすることが出来ないといふのが、浮世の世態であります。病氣となり死ぬまでに、臨終の用心をすれば宜しいと、そんな悠長な話ではないのであります。お互ひの精神の中に、確乎不拔の信仰の心が燃えて居りますれば、いつ死の魔風に襲はれましても、泰然自若、徐に後事を托して、大往生を遂げることが出来るのであります。

因果にもいろくあり

さて信仰に徹底し、臨終の覺悟を大盤石に置くには、佛教の三世因果

の理を知ることが必要であります。自分の行つた事柄に就いては、その結果報酬が、明かにあるといふ、因果律の關係を知ることがあります。業因に對する果報は、三世を通じて現前するといふ事實を覺ることでもあります。諺に「桃栗三年、柿八年」といふことをいひますが、同じ植物であつても、之を植ゑて三年後に果實するものもあれば、八年にして果實するものもあります。印度の植物で、「たくだ樹」といふ木は、百年にして始めて實を結ぶといふことであります。又朝に生れて夕に死するといふ陽炎のやうなものもあり、稻は一年の内に米になり、麥は年を迎へて收穫が出来るといふやうに、植物でさへ蒔いたり植ゑたりした因縁に對して、果報の現はれに、早晚の懸隔があるのであります。環る因果

にも、いろ／＼さまざまの現はれ方がありますが、こゝには臨終に心得べき一事に就いてお話し致します。

善因善果、惡因惡果といふことは、物理を究める上に於ての原理原則であります。佛教上、この善惡の因果は如何様に説かれて居るかといふと、「善惡因果經」乃至は「業報差別經」の中から、須要の點を拔萃すれば、凡そ佛教では、六道とか十界とかいつて、いろ／＼むづかしいのであります。その中で先づ、かう説かれて居ります。

「惡道に墮ちるものは、風火を生ずるが故に、動熱して苦み多く、人間に生るゝものは、地水を去るが故に、漫うして苦みもなく、又惡道に墮つるものは、心足に終り、人に生るゝものは心臍に終り、天に生るゝも

のは心胸に終る、生死を出づるものは心胸に終り、或は頭に終る」

又俱舍論には、

「漸死は、足と臍と心と、最後に意識滅す」

又守護國界陀羅尼經の卷第十二には、地獄に墮つるに十ありと説かれてあります。即ち、

「一には、夫妻男女眷族を惡眼を以てまもり見る。二には、兩手を擧げて虚空を捫摩す。三には、善知識の教に順ぜず。四には、悲哭し咽んで涙を流す。五には、大小便利を覺えず。六には、目を開かず。七には、頭を持ち上げて四方を見る。八には、立ち臥して吞食す。九には、身口臭して穢る。十には、足膝戰慄き怠し。十一には、鼻傾く。十二には、

左眼まじく。十三には、兩目變して赤くなる。十四には、兩目を覆して臥す。十五には、身を縮め、左の脇を地に付けて臥す」とあり。又餓鬼に墮つる八相を示して、

「一には好んで其の唇を舐む。二には、身熱して火の如くなり。三には、常に飢渴を憂へ、好んで飲食を説く。四には、口を張つて合せず五には、兩目濁き涸れて、くまたか、孔雀の如し。六には、大小便洩れず。七には、右膝先づ寒ふ。八には、右手を常に擧ぐ」とあり、かゝる人は、慳貪にして少しのものでも、人に施さないからであるとあります。

又畜生道に墮つる五相が、左の如く説かれてあります。

「一には、妻子を貪愛して捨てず。二には、足手の指を屈む。三には身遍く汗を流す。四には、麤嘘の聲を出す。五には、口内に泡を嚙む」
それから、人と生るゝ十相を説いて、

「一には、善念を生じ、柔軟の心、福德の心、出發起心をなし、憂心を生ぜず。二には、苦まず。三には、一心に父母を思ふ。四には、妻子男女に憐愍の心を作し、斯の如くにして、常に愛せず瞋らず。五には、兄弟、姉妹、親戚の姓名を聞かんとす。六には、心錯亂せず、亦心正直にして諂誑なし。七には、父母親友、妻子眷族、善く我を守ることを知る。八には、營事を見て、讚嘆を爲す。九には、家内の事を遺屬す、或は寶貨を示し出す。十には、淨信心を發し、佛法僧を請じ

向ひ、歸依の南無佛陀、南無達磨、南無僧伽、我れ今歸依すと云ふ」
天に生ずる十相を説いて、

「一には、憐愍の心を發す。二には、善心を發す。三には、歡喜の心を發す。四には、正念を現前す。五には、諸の臭き穢しきことなし。六には、鼻傾き倒るゝことなし。七には、寶物妻子眷族を愛し戀ふることなし。八には、眼色淨し。九には、面仰いで笑を含む。十には、天人我れを來迎すと云ふ」

とあります。この人天に生ずるものと、淨土に生れるものとは、その間に餘りの相違がないのでありまして、之を病者の心根に依つて、知ることが出来るのであります。

極樂に生るゝには

固より極樂を願ひ、佛の本願を信じて、臨終にも善知識に値ひ、至心に念佛を唱へますときは、極樂に生ずることは、つゆ疑ひはないのであります。

「さならで正念ならんには、往生にはあらず、又惡道の相現せば、善知識、丁寧ていねいに教へて、念佛を勸すすむべし。聽やがて罪滅して聖衆來迎しょうしゅうらいおうに預あづからん……」

と御文中おんふみちうに明らかに、如何なる惡相あくさうが現はれようとも、至心信心しんしんの功德くどくに依つて、佛名ぶつみやうを稱なづふるものは、往生極樂わうじやうごくらくを得るとのみ、證明しょうめいがせられ

てあります。又觀無量壽經くわんむりやうじゆきやうには、

「或は衆生あまひしうじやうありて、不善ふぜんの業ごふたる五逆十惡ぎやくじゆくを作りて、諸もろの不善ふぜんを具ぐす斯かくの如ごとき愚人ぐじん、惡業あくごふを以もつての故ゆゑに、まさに惡道あくだうに墮おちて多劫たごふを經歷きやうりやくして、苦くを受うくること、窮きはまりなかるべし。斯かくの如ごとき愚人ぐじん、命終めうじゆうの時ときに臨のぞみて、善知識ぜんちしきの種々しゆんぐに安慰あんゐして、爲ために妙法めうほふを説ときて教をへて念佛ねんぶつせしむるに遇あへり。此この人苦ひとくに逼せめられて、念佛ねんぶつするに違いあらず。善友ぜんいうつげて言いはく、汝なんぢもし念ねんずること能あたはずば、まさに無量壽佛むりやうじゆぶつと稱しやうすべしと斯かくの如ごとき至心ししんに聲こゑをして絶たえざらしめ、十念じゆんを具足ぐそくして、南無阿彌陀佛なむあみだぶつと稱しやうす。佛名ぶつみやうを稱なづするが故ゆゑに、念々ねんくの中に於おいて、八十億劫おおくごふの生死せいしの罪つみを除のぞく」

と明かに示しなされて、悪人の機類の往生すべきことを證明遊ばされてあります。又浄土九品往生經にも、

「僅にも南無阿彌陀佛を一聲稱へたものは、四重八重五無間等の罪業も、悉く消滅す」

と諸經に示すところ、同軌であります。これ彌陀深重の誓願力であつて、悪人の往生成佛の縁を説かれたものであります。それでありますから、誰方でも、平素日課にして十遍でも二十遍でも、念佛を稱へましたものは、その日、その日に作り行く罪業を打消して、往生を遂ぐる事が出来るのであります。之を滅罪生善の利益と申すのであります。されば、假ひ日々の家業は多忙でありましても、信仰心を鼓舞して、日課念

佛の功德を積まれ、いつ無常の大嵐が吹き來り、この世に永き別れを告ぐる命終の時が参りますとも、狼狽へ騒ぐことのないやう、用心せられんことを、衷心より望む次第であります。

臨終の用心

要するに臨終の用心としては、日常、信仰の徹底するといふことが肝心であります。之が證據は信仰の決定した士女の臨終をお調べになれば分明であります。實例は山ほどありますが、紙數に限りがありますからこゝには述べません。古人の語に、

「手と足は忙しけれど南無阿彌陀佛と口と心の暇に任せて、稱へるぞ

善い哉

とあり、法然上人の勅修御傳には、

「念佛を申す申す用事をすると思へよ。用事をするする、念佛を申す

とは思ふなよ」

と仰せられてあります。實に簡にして要を得た教であります。

長者たる心得

孝子尸迦羅越と釋尊

大聖釋尊は三十成道以來、八十涅槃の曉に至るまで、偏に可憐の衆生を教化し救済せんが爲めに、堅に説き横に説き、席の温まる違がなかつたのであります。その中、印度摩伽陀國の王舍城といふ處の、雞足山中にお出での頃でありました。土地の長者の子に、尸迦羅越といふ者がありました。この尸迦羅越は、なか／＼眞面目の人であつて、毎朝早く起き、身を淨め、髪を梳り、衣服を改めまして、先づ東に向つて四

度禮拜し、亞いで南に向つて四度禮拜し、又西に向つて四度禮拜し、北に向つて四度禮拜し、更に天に向つて四度禮拜し、地に向つて四度禮拜することを、一日も缺かさず致して居りました。

折柄釋尊が、托鉢の路すがら、偶々その様子を御覽になつて、感心の若者である、一つ教化を試みようかと、わざ／＼尸迦羅越の家にお立寄りなり、仰せられるには、「御身は毎朝早く起きて、六方を禮拜して居る何故それを勵行して居るのである」と尋ね給うた。尸迦羅越謹んでお答へ申すには、「お尋ね下されてお恥かしう存じます。未だ父の在世中、毎朝六方を禮拜せよと教へられましたので、何の意味かは存じませんが、父が亡くなつたとて、その命を無にするには忍びませんので、今に實

行して居る次第でございます」と申し上げました。

釋尊は、之をお聞きになつて、父の亡き後までも、その行を變へないとは、近頃殊勝の至り、奥床しい至りである。「御身の父が六方を禮拜せよと教へたのは、唯々身を以て禮拜しよへすれば好いではない。これには深い意味が籠つて居る！」。尸迦羅越は釋尊に最敬禮して、「私は今まで唯々父の命令に違へまじと、無我無心に禮拜したばかりでございます。六方に禮拜する深い意味を御教示下さいませれば仕合でございます。」

六方禮經の四戒

此に於て釋尊は、孝子尸迦羅越の請を諒とせられ、六方の禮拜に托し

て、人倫道德の要を、通俗的に明示されたのであります。これぞ有名な「佛説六方禮經」でありまして、お互ひ人間たるものが、身を修め、家を齊へ、社會に活動し、國家を隆昌にし、世界を平和にする千古の教訓であります。さて釋尊は、孝子尸迦羅越に宣りたまはく、

「凡そ世の中にあつて、多くの人から長者と立てられる程の者は、一には、諸の生物の命を取つてはならぬ。二には、他人の物を盗んではならぬ。三には、配偶者以外に愛を注いでではならぬ。四には、妄語、兩舌を弄んではならぬ。この四つの戒を守つて、決して犯さないやうなさい。さうするときは、現世に於ては善き果報を得て、人からは敬はれ、又後の世では天國に生れることが出來て、果報めでたい身となるのである

るから、深く感銘して、等閑に附さないやうなさい。却す却すも、この四つの戒を能く守つて、萬一にも憐れ情が起つたり貪りの念が起つたり姪らの心が萌したり、不平不満の心が起つたり、因果の道理に迷うて、可愛ゆい、憎いの情にほだされるやうなことが起りかけたならば、自ら之を戒めて制し止めなければならぬ。若しこの戒を輕んじて、かゝる不都合の心情を制することが出來なかつたときは、悪い名が日々の高つて、恰も晦日に近いお月様の光が、次第に薄らいで行くやうに、今まで謳はれた名聲は、次第に地に墜ちて、遂には社會からも人からも指彈され、生存の無味を嘆つに至るでありませう。又能く此の戒を守り、日々起る妄執惡念を打拂ひ、進んで善行を勵む者は、新月の次第に光を添へ

て、遂には満月となつて、その光が三千大千世界に照り渡るやうに、社會からも尊敬せられ、その徳は愈々積んで、不退の眞樂は得られるのであります。

この四つの戒は、言葉を換へていへば、不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語不兩舌戒であり、彼れが六方に向つて、四度づゝ禮拜するに因まれたのであります。不殺生、不偷盜、不邪淫は身の戒であり、不妄語不兩舌は口の戒であります。妄語といふは虚偽を言ふこと、兩舌二枚舌を使ふこと、人と人とを仲違ひさせることであります。口の戒を今少し詳しくいふと、綺語といつて、矢鱈に飾り立つて言つたり、戲談いつたりすること、惡口といつて他人の惡口をいふことであります。この

外、心意の戒としては不貪欲戒、不瞋恚戒、不邪見戒といつて、貪るな、怒るな、邪の心を起すな、の此の三つがあります。以上、身に三戒、口に四戒、意に三戒、合せて十戒を佛敎道德の根基と致します。

財を得るに六戒あり

それから、釋尊は六方の禮拜に因んで長者の子、尸伽羅越に、六の戒を興へられました。釋尊は四戒を犯してはならぬことをお示しになり、更に人の錢財を失ひ、家産の傾くる原因をお説きになつたのであります。その六の戒とは、左の通りであります。

一には、酒を飲むことを喜んではならぬ。いふまでもなく、酒を飲む

といふことは、諸種の罪惡を犯す根源であります。無益の金錢を亂費して、貴重なる時間を費すことが夥しい。健康を害し、無病長生が出来ぬ、人と争うて名譽を失ふ、姪蕩の原因となる、今日、禁酒會が各所に設けられ、亞米利加などは法律を以て禁酒して居りますが、禁酒運動の初めは、恐らく佛教でありませう。併し私は何でも禁酒せよとは申しません。藥餌養生として飲むは宜し、酒に飲まれてはならぬ、一人前でないものは、飲んでほなりません。

二には博奕を打つてはならぬ。博奕は日本の法律には禁ぜられて、殺人、窃盜、詐欺に並んで、罪惡としてあります。矢張この位、貴重の間を空費し、錢財を無駄にし、身心を害し、社會を亂すものはありませ

ん。自分の金品でするから宜しいではないのであります。假ひ賭け事でもなくとも、圍碁、將碁、歌留多その他の勝負事は、時間を空費することが甚だしいから、矢鱈にすべきことではありません。殊に投機的の株を賣買する如きは、それが爲めに財産を蕩盡するものが多い、資産家として最も戒しむべきことであります。一體に勝負事を好むといふと、自然眞面目に働くことが嫌になり、不性怠慢となり、社會の風教を紊亂し、良習を損ふことが夥しいのであります。たとひ運よく賭け事で勝ちまして一時に金錢を得ましても、理道に備けた金と違ひ、決して其の金が身に附くものではありません。何れ相方とも遊んで居て居ることですから、多くの人が倒れ、一人を益するといふのでありまして、その一人も

一つ人が勝ち通してはありませぬ。それが負け通しになると、千萬の長者も一朝にして赤貧どころか、身代限りを打たねばならぬこととなり、それではたまらぬと悪心を起し、心ならずも横領詐欺の念を起すこととなりませぬ。銀行會社の倒産、重役の犯罪、官吏の收賄、多くこんなことであります。戒めざるべけんやであります。

三には、夜は早く臥し、朝は晩く起き、ごろ／＼するを喜んでならぬ。朝起は立身出世の基であります。それを朝寝をして居りますと、第一、清新の空氣も吸へず、身を遊惰に持ち崩して財産を減らすばかりでなく、その身の健康を害し、出来ることも出来ないといふ、重ね／＼の損があります。

昔し四國のある處に、非常な豪農の家がありました。その豪農の息子は、俄に兩親を亡ひまして、その家を相続することになりましたが、その男は、非常に朝寝をすることが好きで、いつも家業を怠り勝ちでありました。だから折角受け繼いだ澤山の財産も、日々に減る一方で、財政は窮乏に越くばかりでありました。固よりこの若主人は、別に濫費をするのではありませんが、朝寝をすることだけは止めませんでした。すると一日、ある善知識が参りまして、その若主人に對つて申しますには、「あなたの家の後の田のほとりに、この頃毎日のやうに黄金の鳥が啼いて居り、その鳥の啼き聲の微妙なることは、言語に絶して居ります。この鳥は夜が明けて、日光が出づると、何れへか飛んで行つてしまつて、見る

ことが出来ません。その鳥を見ようと思つたら、夜が未だ明けぬ曉に於て、竊にその附近に行つて見なければなりません」之を聞いた豪農の男は、不思議な事に思ひまして、好奇心に驅られ、翌朝は朝未だきに起き出で、裏の田地のほとりに来て見ますと、時宛も秋の收穫時でありましたので、數多の使用者等は、その豪農の田に出来た稻を思ひ思ひに刈り取つて、之を主家の藏に運ぶことはしないで、己が家にと運んで居つたのであります。さすが朝寢の好きな男も、この有様を見て、自家の衰頹する原因は、こゝにありと覺りました、よく／＼注意して見ますと自分が朝寢をして居て知らない間に、澤山の雇人等は、主人の目を偷み手に着け、足に着け、主家のものを自宅に送り、今まで味方とばかり思

つて居た雇人どもは、皆主家に巢喰ふ白蟻であつたのであります。此に於てその人は、今まで朝寢をした不明を悔い、それからといふものは、朝は早く起き出で、奉公人に率先して、家業にいそしむやうになりましたので、その家は次第に回復し、終りには倍舊の盛運を迎へたといふこととあります。

一體、人間の運といふものは、之を運ぶと訓じまして、朝は早くより夜は晩くまで、自分の身體を運ぶ、そこに財を整へ、家を齊へる本があるのであります。釋尊の朝寢早寢をお戒めになつたのも、大に理あることと知られませう。

四には、人はすべき交際は必要だが、これといふ用事もない客を招く

ことを好み、又人をして請ぜしめんとするなどは、しないやうにせねばならぬ。徒に客を招いて、無駄に時間を費し、今日は歌舞伎、明日は帝劇、三越に行き、或は茶屋待合に出入し、酒池管絃の歡樂にのみ耽つて居りますと、遂には身を亡し、財を破る原因となるのであります。

五には、悪しき友と交はることを喜んではならぬ。或は飲み友だち、遊び友だち、借金友だちなどと交はると、いつしか自分もその悪に泌み込んで、蹉跌また蹉跌、祖先傳來の財貨をも失ひます。人は何でも、悪い友だちと交はつてはなりません。

六には、驕慢にして人を輕んじてはならぬ。自分ばかり善い人、偉い人のやうに考へて、人を眼の下に見るやうな、心得違ひの者は、人から

憎まれ疎ぜられ、思はぬ損耗を招くこととなります。故に驕らず慢らず謙遜にして居ることは、貧を免れ、財を整ふる一因であります。

以上の六ヶ條が、世の金持にとつて、よい戒めであります。これさへ守つて居れば、福德は圓滿し、幸福の生涯を送つてゆくことが出来るのであります。以下「六方禮經」の原文を掲げて、佛陀の金句を諳誦せらるゝの便とさせよう。但し原文は漢文であります。

「六方禮經」の金句

「佛、王舍城の雞足山中に在す時、長者の子あり、尸迦羅越と名づく早に起きて頭を駭り、洗浴して文衣を著し、東に向つて四拜し、南に向

つて四拜し、西に向つて四拜し、北に向つて四拜し、地に向つて四拜し、天に向つて四拜す。

佛、國に入りて分衛し、遙に之を見たまひて、往いて其家に到り、之を問ひたまふ。尸迦羅越曰く、何の爲めに六向拜するや、これ何の法にか應ずると。父在せし時、我に六向拜を教ふ。何の應なるを知らず。今父喪亡せり。敢て後に於て、之に違はざるのみと。佛言はく、父汝に教へて六向拜せしめしは、身を以て拜するにはあらざらん。尸迦羅越、即ち長跪して言く、願くは佛、我が爲めに、此の六向拜の意を解け。佛言く、之を聽きて、内心中に着けよ。其れ長者黠人有つて、能く四戒を持ちて犯さざるものは、今世には人の敬ふ所となり、後世には天

上に生ぜん。一には、諸の群生を殺さされ。二には盗まされ。三には他人の婦女を愛せされ。四には、妄言兩舌せされ。

心に貪婬恚怒愚痴を欲せば、自ら制して聽くこと勿れ。此の四意を制するものは、惡名日に聞えて、月の盡くる時に、光明稍く冥きが如し能く自ら惡意を制するものは、月の初めて生ずるに、其の光稍く明かにして、十五日の盛滿の時に至るが如し。

佛言く、復六事あり。錢財日に耗滅す。一には、飲むことを喜む。二には、博掩を喜む。三には、早臥、晩起を喜む。四には、客を請ずるを喜み、又人に請ぜしめんと欲す。五には、惡知識と相隨ふを喜む。六には、驕慢にして人を輕んず。

上頭の四悪を犯し、復是の六事を行ひ、其の善行を妨げば、亦治世を憂ふることを得ず。錢財日に耗滅せん。六向拜するも、當に何の益かあるべき。」

朋友の選び方

朋友は最も近きもの

朋友の大切なることは、その修養の上に於ても、その交際の上に於ても、その事業の上に於ても、甚だ大切であります。君父師といひ配偶者といつても、何れも地位が違ふか、性が違ふか、格段に年齢が違ふか、志が違ふとかして、眞實、意志感情を打明け難いこともありますが、朋友は志を同じうした似た者であるから、一番打明け易いものであります。従つて之が交際の影響は、實に著しいものである。而も君父と

か兄弟とかとは違つて、全く後天的で、其の初めが隨意的のものでありますから、之を選択するに、その初めを慎み、より善き朋友を得るやう致したいものであります。そこで大聖釋尊は、「六方禮經」の中に、朋友の選び方を親切に説き示されて居ります。

悪友とは如何

先づ第一に、四種の悪友を擧げて居られます。それは、心の中には嫉みを含みながら、表面だけは、親友のやうな顔をして居るもの。面前では親切らしいことをいひながら、陰に廻つては、悪口をいふもの。人に災難不幸等があつた場合に、愁ひ悲むやうな振りをしながら、陰では却

て之を喜ぶもの。表面だけ、親切らしく交はつて居て、心の中では、斷えず機會を覗ひ、之に怨みをしようと思ふもの、この四通りだと仰せられ、更に他の方面から、悪友の四種類を擧げて居られます。

一には悪いことをするを見て、之を諫め諭しても聞き入れず、善行をなさいといへば、故意に悪い者の仲間入をするといふやうなもの。二には、酒を飲むやうな友達に交はる、宜しくないからと注意すれば、故意に酒飲みとばかり、交はるといふやうなもの。三には、一つの業を守つて居れば宜しいから、専心になつて勵むやうにといへば、益々多くの事に手を出して取纏りのつかぬもの。四には、人は交る友に依るといふ言葉があるから、同じ交るにしても、正しい人を友とする方が宜しいとい

へば、故意に賭博者とか無頼漢とかいふやうな者と親しく交はるもの。
以上四種であります。こんな人と交はると、本人の爲めにならないこと
はいふまでもありません。

更に他の方面から、悪友の四種を説かれて居ります。それは、少しで
も氣に入らぬことがあれば、大に怒るもの。急なことがあつて之を告げ
ても、兎角言を左右にして出て来ないもの。危急の場合と見たときには
逃げてしまつて寄りつかぬもの。友の死を見ても、捨て、顧みないもの
この四種が不實極まる悪友であります。

善友とは如何

然らば善友とは、どんな人であるかといふと、丁度悪友の正反對であ
ります。則ち表面から見ると、餘り親しくもないやうに見えても、その
心の中には、斷えず好意を持つて居てくれるもの。本人の前では遠慮會
釋もなく、その行つたことに就いて、よくないことがあれば意見して、
その悪いことを責めもするが、他人に對しては、その人の善いところの
み説くもの。その人が病み患ひをするとか、又は種々の災難のあつたと
きに、その人の身を案じ煩ひ、且つその爲め、慰めてくれるもの。その
人が貧しい暮しをして居るのを見て、少しの間も棄て置かず、百方手段
を盡して、之を裕福ならしめんと計るもの。この四種が善友であります
更に之を違つた方面からいひますと、更に善友に四種あります。

一には、友が貧しくて苦めるを見ては、之を救つてやつて、正業に就かしめんと力むもの。二には、如何なる事があつても、その友と争ふといふやうなことがないもの。三には、日々親しく往來し、又は音信を通じて交りを篤くするもの。四には行住座臥に友達のことを忘れずに思つて居るもの。かういふ頼しい友の外にも、又親切なる友といふべきものが、凡そ四種あると仰せられました。

一には、友達が無實の罪などで、その筋の人に捕へられんとするやうな場合には、之を自分の家に匿つて、その無實の事實を明かにしてやらうとするもの。二には、友だちが病氣の爲めに苦しんで居れば、親切に之を劬り介抱してやるばかりでなく、友達が貧しくて、その療養に不便

を感じれば、之を我が家に伴れ歸り、看病をしてやるもの。三には、友達が若し病氣などの爲めに、死去したときは、葬式萬端の世話をしてやるもの。四には友達がなくなつた後の遺族のことまでも、何かと面倒を見てやるもの。などでありませう。

此の中、第一の如きは、釋尊の時代と今日とは、社會上の事情が非常に變つて來て居りますので、刑事上云々に就いて、その嫌疑を受けて居る人を匿まつて云々といふことは、今日の時勢に於ては、辯護士を頼んで、その無實の罪を疏明するとか、若しくは保釋願を出すとかいふやうな方法を以て、友を思ふの眞情を傾けるといふのが、この内に含まれて居るのであります。釋尊は尙も善友の四種を、左の如く數へて居られ

ます。

一には、友が何かの間違で他人と争ひ、鬭はうとするやうな場合には之を制止し、二には、友が墮落して悪友と交はらうとするやうなことがあれば、之を諫め止め、三には、友が家業を怠らうとする場合には、之を勧めて家業に精進せしめ、四には、友が正しい教へを好まないときは、之を訓へて道に入らしめる。これぞ畏友とか師友とかいつて、一番親むべき友達であります。

朋友はよく選べ

釋尊は諸種の方面から、善友と悪友とを列擧せられまして、最後に、

かう仰せられました。「友人は善いのを選んで、信實を以て交際せよ。悪い友人は遠ざければならぬ。自分は今佛陀となつて居ても、もとく善友と交つた爲めである。」と、實に有り難い言葉であります。釋尊の如き完全圓滿なる人格者も、多く善友に交り給うて、これ程になられたのであるから、凡人は猶更のことです。友達から、意識的に又は無意識的に受くる感化は實に絶大なものであります。殊に幼少の時の友達は、最もその影響を受ることが多い。善にも悪にも、交友次第であるともいひ得る點があります。お互に成るだけ良い友と交り、善い感化、善い協力を受ることが肝心であります。

釋尊が友人選擇法を説きになつた「六方體經」の一部を、左に掲げ

ます。

「六方禮經」の金句

「佛言く、悪知識に四輩あり。一には、内に怨むる心ありて、外に強ひて知識と爲る。二には、人前に於て好く言語し、背後に於て悪を言ふ。三には、急あるとき、人前に於て愁苦し、背後に於て歡喜す。四には、外に親厚なるが如くして、内に怨謀を興す。

善知識に亦四輩あり。一には、外、怨家の如くして、内に厚意あり。二には、人前に直諫し、外に於ては、人の善を説く。三には、病瘦縣官には、其れが爲めに征訟憂ひて之を解く。四には、人の貧賤を見ては、

棄捐せずして當に念じ、方便を求めて之を富まさんと欲す。

悪知識に復四輩あり。一には諫曉し難く、之に善をなせと教ふれば、故らに悪者に相隨ふ。二には、之に酒を好む人と伴となる莫れと教ふれば、故らに酒を嗜む人に相隨ふ。三には、之に自ら守ることを教ふれば、益々更に事を多からしむ。四には、之に賢者と友となれと教ふれば、故らに博掩子と厚を爲す。

善知識に復四輩あり。一には、人の貧窮悴乏を見ては、生を治めしむ。二には、人と諍つて計校せず。三には、日に往きて之を消息す。四には、坐臥當に相念ふべし。

善知識に復四輩あり。一には、吏の捕ふる所となれば、將の歸りて之

を藏匿し、後に於て之を解決す。二には病瘦あれば、將の歸りて之を養視す。三には、知識死亡すれば、棺斂して之を視る。四には、知識己に死亡せば、復その家を念ふ。

善知識に復四輩あり。一には、鬪はんと欲せば、之を止む。二には、惡知識に隨はんと欲せば、之を諫止す。三には、生を治むることを欲せざれば、勤めて生を治めしむ。四には、經道を喜ばざれば、教へて喜ませ、之を信ぜしむ。

惡知識に復四輩あり。一には、小に之を侵せば、便ち大に怒る。二には、急あつて之を情視すれども、肯じて行かず。三には、人の急あるを見るときは、人を避けて走る。四には、人の死亡を見て、棄て、視ず。

佛言く、その善き者を選んで之に従ひ、惡き者は之を遠離せよ。我れ善知識に相隨つて、自ら成佛を致したりき。」

親子相互の心得

佛教と親子道

親と子とは元來、一心同體であつたものが、分れて親と子になつたものであるから、これ程親しいものはありません。故に儒教などでは、父子の情を以て、人倫の根本とし、親孝行をしない位の人には、何をしても駄目であるとしてあり、「忠臣を求むるは、必ず孝子よりす」といふ名言さへあります。けれども儒教などでは、子の親に對する本務、即ち孝行の必要にして、最も大切なることを説いて置きながら、親の子に對す

る本務、即ち慈愛の必要にして、最も大切であることは、さう諄々として述べて居りません。それは言はなくとも、子を慈愛しない父母はなく且つ孔子の教へらるゝ人が、大抵、人の子弟であつたから、慈愛を略して、孝行を力説せられたのでもありません。故に論語にも、一ヶ所だけには、天下を治むる根本條件として、「君君、臣臣、父父、子子」と、親子を對等に説かれたところさへあります。所が佛教では、最も明白に、親子間の道德本務が説かれて居ります。これは固より三千年前の經典教へ草であつても、大正の今後、否幾千萬年の將來にあつても、この精神でゆけば、宜しいのであります。

親に對する心得

初めに子が親に對する本務心得を説きになつて居ります。

「一には、當に治生を念ずべし」と、治生とは、生活を治むること、即ち衣食住その他の世渡りのことであります。換言すれば家業、職分のこと、生活上のこととあります。子は當然、生活上のこと、職分上のこと、世渡りのことなど、念慮工夫して、より善き生活をなし、決して父母に心配をかけてはなりません。

「二には、夙に起きて奴婢に勅令し、時に飲食を作らしむ。」と、いふまでもなく、起居食事は、家庭生活上、一番大切であるのに、自ら遅く起きるやうでは、召使もさう早くは起きず、隨て食事も遅くなるものがあります。即ち朝は自ら早く起きて、召使どもにも命じて、炊事をなさしめ、さまりよく父母に供し、我れも人も飲食せねばならぬのであります。

「三には、父母の憂ひを益させれ」と、何事につけても、父母の心配を増さないやう、注意し努力しなくてはなりません。家内が和合して、何事もなく、古歌の所謂「何事も無さを寶ぞ年の暮」といふやうに、父母の憂ひとなることのないやうに、心懸をかけぬことが肝要であります。「四には、常に父母の恩を念ふべし」と、眞孝は孝を忘る。念々是れ孝で、行往坐臥、父母の恩を忘れないのであります。父母ありて我が身、

此の世に生じ、我が身、此の世に成長し、教育を受け、社會に出づることとも出来る。たとひ父母に、それ丈の働きがないにしても、善につけ惡につけ、その慈念を受けることは、他に比類がありません。父母の恩たるや、山よりも高く、海よりも深いのであります。

「五には、父母の疾病には、恐懼して醫師を求め、之を治せしむべし」と、若し父母の一方若くも双方とも、病氣に罹つたとか、負傷でもしたといふやうな事があつた場合には、十分心を盡して、早速然るべき醫師を招いて、之が全治を圖り、特に後を大切にしないでななりません。こんなことは分り切つたことのやうであります。が、事實忙しかつたり、子にかまげたり、妻子に氣を奪はれたりして、肝心な老親に對する注意を

怠るものが少いとは言へないのであります。

以上お説きになつたやうに、子たる者は、赤心を傾けて、父母の恩恵に報いるやう、奉仕したいものであります。

子に對する心得

偕て親たる者が、その子に對するにも、五つの心懸が必要であると、釋尊は告示になつて居られます。子としては、親乃至祖先に對する孝行こそ、最も大切であります。親としては、子孫を慈育すること、何より大切なることであります。

「一には、當に惡を去り、善に就かしめんと念ふべし」と、眞に子を愛

するなら、子の悪いところを正して、善い方に引き寄せ、子の人格を高くし、國家社會に盡させたいものであります。子の爲めには家産を遺すよりか、子の心田に正義の種を植ゑ、之を成長せしむるのが、何よりであります。

「二には、計書疏を教ふべし」と。一は徳育であります、二は智育であります。計と書疏とあるは、數學や書籍を教へることでもあります。今日では精神科學、物質科學、百般の學術のことでもあります。

「三には、當に經戒を持つことを教ふべし」と。これは宗教教育のことでもあります。佛の教へられた經典や戒法を保つことでもあります。これを精神教育の根本となり、人格養成の基礎となるのであります。今日の

社會、今日の家庭の父兄たるもの、かゝる根本的の大切なることを努めないで、子弟の輕薄や危険を云々する、勞して効なしといつて宜しい。

「四には、早く爲めに婦を娶るべし」と。子が既に年頃に至つたら、良縁を求めて婚姻を結ばしめて、漸らしい家庭を作らしむべきであります。配偶者の善惡は、頓て其の子の一生を支配するものでありますから、決して之を疎にしてはなりません。

「五には、家中の所有は、當に之を給與すべし」と。これは即ち相續のことでもあります。否相續しないまでも、子が已に長じたら、財産のある家では、相當に分けてやるとか、兎角生活の立つやうに、してやらねばなりません。

古來、多くの教には、子の親に仕ふる道は、いろくに説き、深切に示してあるが、之に反し、親の子に對する本務心得を説いてあるのは、甚だ稀れであります。然るに釋尊は、子が親に對する務めをお説きになると共に、親の責任心得をも、具體的にお説き示しになつて、その子を一人前に仕立て上げるまでの、注意心得が擧げられてあります。唯々子が親に對する務めのみを説いて、親の子に對する務めを缺いて居りましては、完全なる教へとは、言へないのであります。ここに佛陀の教の圓滿完全なることが拜せられて、有り難いこととあります。重複ながら、「六方禮經」の全文を、左に掲げて、この章を了ります。

「六方禮經」の金句

佛言く、東に向ひて拜するには、謂く、子の父母に事ふるに、當に五事あるべし。一には、當に治世を念ふべし。二には、早に起きて奴婢に勅令し、時に飯食を作らしむ。三には、父母の憂を益さざれ。四には常に父母の恩を念ふべし。五には、父母の疾病には恐懼して醫師を求め之を治せしむべし。

父母の子を視るに亦、五事あり。一には當に惡を去り、善に就かしめんと念ふべし。二には計書疏を教ふべし。三には、當に經戒を持つことを教ふべし。四には、早く與に婦を娶るべし。五には、家中の所有は、

當に之を給與すべし。」

師弟相互の心得

師道の頽廢と青少年

私共は父母より生れ、父母に成育されますものの、教師なくては、學を習ひ、道を知り、一人前の人間となることは出来ません。だから、昔は、君父師と稱し、天皇陛下と父母と教師とは、一番尊敬すべく奉仕すべきものとなつて居たのでありますが、今日では、その内特に師弟の道は殆ど地に落ちて、行くに師の影を踏まぬ所か、氣に入らないと、師の頭をも打つものがあります。それは西洋の悪い真似といはれて居ります

が、西洋には、日本のやうに教師を毆打することなどのないのは、固よりのこと、同盟休校するなどのことはないやうであります。今日の青少年は、よく釋尊の教法を讀んで、説の如く之を躬行するやう、努力したものであります。尤もそれは青少年ばかりが悪いのではなく、一般社會の風潮が悪いからであり、又教師の方よりいへば、昔の教師のやうな眞面目さと、熱度が缺けて居るからなのでありませう。

教師に對する心得

初めに教師に對する本務心得が説かれてあります。

一には、當に之を敬難すべし。とあります。敬難とは、敬は即ち敬ひ

重んずることであり、難は憚るといふ意味であります。教師を尊敬して決して輕々しく思ふなどの意であります。古から一路を行くに弟子は師よりも七尺下つて、その影を踏まず」といふ、實にお互の蒙を啓き、智徳を發達さして下さるところの、教師の恩は、實に山岳も雷ならぬのであります。然るに今日、師弟の道は頽廢して、師を見ること、宛も雇人の如く、月謝を拂つて居るのであるからといつて、教師に長服などしません。そんなことでは、本當に道を知りことも出來ず、教へられることも輕蔑するやうになるのでありますから、先づこの戒めをお示しになつたのであります。

二には、當に其の恩を念ふべし。とあります。當に其の海岳の恩を思

つて、常に感謝の意を表さねばなりません。一體教師を軽んじたり、その命令に反抗したりするのは、感謝の意がないからであります。月謝を拂つたからといつたところが、無形の知識や徳望や技倆や愛育は、決して金銭で購ひ得るものではありません。一體人間は、権利は二の次として、義務を重んじて行かないと、決して平和な清き美しき生活を送つて行くことは出来ません。この邊、今の青少年諸君が心すべきこととあります。

三には、教ふる所、之に隨へ。とあります。無論教師といつても、人間であるから、缺點もあれば病所もないことはありませんが、少くとも自分よりは、智徳技倆の何れか、勝つたものであるから、謹んで教を

聞き、之を身に體し、躬行するやう致したいものであります。その教へられた所は、音に口ずさむのでなくして、之を實際に行はなければなりません。佛教には、聞、思、修この三つが必要であるとしてあります。唯々教を聞いた丈で、心に思うて之を會得しなければ、之を聞いた甲斐はないのであります。又如何に之を心に會得しましても、實際行はなかつたときには、これ亦何の効果もないと説くのであります。師の教は、則ち之を實踐躬行して、少しも違はぬやうにしなければなりません。四には、思うて厭かざるべし。とあります。師の教の道を中途で廢したり、好い加減なところで、倦いてしまつたのでは、何の役にも立たないのであります。如何なるむづかしい事柄でも、必ず之を厭ふといふや

うなことがなく、熱心に其の教に従ふことが肝要であります。

五には、當に後より之を稱賛すべし。とあります。自分を教へた師の徳は、必ず之を稱揚しなければなりません。世間には往々、人より教を受けて置きながら、後ではその人のことを悪しざまに言ひ觸らして、師の技倆、師の智徳を傷けるやうな不徳の者も少くないのであります。師に對する弟子の道として、こんなのは最も卑むべきものであるとお戒めになつてあるのであります。

弟子に對する心得

それから教師たるものの、弟子に對する本務、即ち教師が學生生徒兒

童を教へ導く上に於ても、五つの心得が必要であるのであります。

一には、當に疾く知らしむべし。とあります。苟も教師たる者は、教へ惜みをしたり、好い加減の教へ方をしたり、門下生の質問を面倒がつたりしてはならぬ。熱心に徹底的に教へ込むやうにしなくてはなりません。

二には、當に他人の弟子に勝らしむべし。弟子たる者折角、自分を師と頼んで居るのだから、その弟子の好意に報いて、他人の弟子より勝らしめるやう致したいものであります。これを教師としての人情で、その位熱誠がなくては、弟子を心服させ、善化させることは出来ません。

三には、知つて忘れざらしめんと欲す。とあります。師たる者は、之

を教ふるに生半可の事をしないで、熱誠を以てその智能を啓發し、徹底的に之を教訓し指導し、一たび得ては、之を失はないやうにさせたいものであります。

四には、諸の疑難は、悉く爲めに之を解説す。とあります。師たる者は、どこ迄も弟子に教へ込んで、疑はしきは解き、むづかしきは之を決して、十二分に了解するやう説明して置かねばなりません。それを唯々蓄音器の如く、講説し筆記せしむるのであつては、生徒は唯々試験さへ通ればよい、その日さへ過せばよいとなり、教師を器械視し、雇人視するやうになり、教師の威嚴はなくなり、所謂師道の頹廢を來すのは、當然であります。さなくとも長上を輕視するのは、世界の風潮ともい

ふべきでありますから、今人は特に心すべきであります。

五には、弟子の智慧を師に勝らしめんと欲す。とあります。弟子は、自分より豪くならせたいものであります。それを俸給又は謝禮に應じて教へるやうでは、弟子も亦、月謝が拂つてあるから、別に有り難くはないといふやうになります。自分より勝るのを忌むやうな教師は、教師たる資格がないといつて宜しいのであります。近世の志士にして大教育家たる吉田松陰が佐久間象山に贈つた詩の中に、「敢て身後の實に俟つ」とありますが、人を教へるには、實に斯る心懸がなくてはなりません。弟子は即ち思想學術の延長であり、之に依つて、自己の缺點を補ふの覺悟がなくてはなりません。後から生れたものは、それだけ先人の得た經驗

なり智慧なりを、我がものにするのであるから、社会は日に月に進み、後世實に怖るべきであります。此の意味に於て、自分と同じ程度に、弟子を引上げたのでは、決して充分とは申されないのであります。このやうに自分より勝れたものに、取り立てる覺悟があつてこそ、始めて社会の進歩に貢献することが出来、弟子をして感謝に咽ばしむることが出来るのであります。

このやうにして前に述べた覺悟が弟子にあり、師に亦この覺悟がありましたなら、師弟の道は、即ち立つのであります。釋尊は三千年前に、かゝる活説教をなさいました。今の師たる者、生徒たる者、相互にこの本務心得を守つたなら、何ぞ師道の頹廢なり、忌はしい學校騒動などあ

らうや、ありはしないのであります。以下「六方禮經」の原文を記して、之を終りとしませう。

「六方禮經」の金句

「南に向ひて禮拜するは、謂く、弟子の師に事ふるに、當に五事あるべし。一には、當に之を敬難すべし。二には、當に其の恩を念ふべし。三には、教ふるところ、之に隨ふべし。四には、思つて厭かざるべし。五には、當に後より之を稱譽すべし。」

師、弟子を教ふるに、亦五事あり。一には、疾く知らしむべし。二には、他人の弟子に勝らしむべし。三には、知りて忘れざらしめんと欲す

四には、諸の疑難は、悉く爲めに、之を解説す。五には、弟子の智慧を師に勝らしめんと欲す。」

夫婦相互の心得

古來佛教に對する誤解

司馬溫公は、夫婦は人倫の始めて、この道ありてこそ、父子も生じ、兄弟も生じ、社會も生じ、國家も生じ、君臣も生ずる。五倫道德の中にも、夫婦の道こそ、いと尊けれといふ意味のことを申されて居ります。西洋の道德は、殊更夫婦を以て人倫の根本とし、大に夫婦の道を重んじてあります。然るに佛教は超世の教、出俗の法であるから、夫婦の道はさう重く説かれて居ないかといふに、決してさうではありません。これ

が不正不義を防がん爲め、五戒の中にも、十戒の中にも、邪淫戒を述べ
てありますことは、御承知の通りであります。

所が佛教には、女に五つの障ありとか、女は地獄の使なりといつて、
女を軽んずるとか、わる者のやうに待遇してあるところもないことはあ
りませんが、これは婦人の缺點を擧げて、動もすれば性關係を生ぜんと
する、門弟どもを警められたのに、過ぎないのです。

夫に對する心得

さて人倫の三綱ともいふべき夫婦の道たるや、矢張り「六方禮經」の中
に、双方の本務心得が説かれてあります。先づ婦の夫に對する本務とし

て、左の五ヶ條が擧げられてあります。

「一には、夫、外より來らば、常に起つて之を迎ふべし」と。夫婦は本
來、異體同心でありますから、夫の歸りを迎へ、その出で、行くのを送
ります。誠意を込め、禮儀を正し、出迎のときは、我が身を離れて、又
會ふが如くに、思はねばなりません。

「二には、夫出でて在らざれば、當に炊蒸掃除して、之を待つべし」と
夫婦は同心協力すべきもので、相互に敬愛し、相互に扶養の義務をも負
ふのであります。普通の場合に於ては、夫が外で働き、女が家を守る
のであります。そこで夫が外で働きますときは、婦が内に在つて、家内
を守り、家事を整理すべきは申す迄もなし。特に大切な食事は、夫の勞

力の性質、態度、趣味、嗜好に基き、何か目先きの變つた、夫の好みに投ずるやうなものを工夫して造り、絶えず經濟のことにも心を配つて、冗費の支出がないやうに心掛け、何事も家の内が整頓して居るやうに、掃除萬端手落なくして置きたいものであります。夫が外から歸つて来て不快の感を懐かないやうに努めたいものであります。これは實に内を守つて居るものゝ、當然の本務であります。特に氣の利いた夕食は、夫の終日の勞を慰するに足るものでありますから、特に主婦としては、頭腦と勞力とを用ゐなくてはなりません。こんな事が面白くゆかない爲めに心ならずも夫が茶屋遊びをし始め、一家紛亂の本となつた、破鏡の嘆となることがあります。釋尊が三千年の昔、斯る微細の點に注意を下し置

かれたることは、私共の感激に堪へないところであります。しかもかうした些細の注意が、直に人倫の大問題であるところの、一家和合の根本義となるのであります。

三には、外に姪心あることを得ざれ、夫罵り言ふとも、之を罵り返して、色を爲すことを得ざれ。とあります。「外に姪心あることを得ざれ」とは、所謂、婦人の貞操問題であります。現行の日本の法律では、姦通罪の一項がありまして、夫以外の男子に關係した婦人には、嚴重に法の制裁を國家が加ふることになつて居ります。これは一つには家族制度を根基として立つて居りますから、混血の懼れがあり、引いては人倫を破るに至るものですから、さう規定されてあるものと思ひますが、貞

操の保持といふことは、夫婦道の根本をなすものでありまして、佛教には邪淫戒として、固く之を戒めてあります。假ひ身を以て貞操を汚して居りませずとも、夫以外の人に心を移せば、即ち精神的には、既に貞操を汚したことになるのでありますから、よく心しなければなりません。近來は能く、戀愛は自由などと申して、二人も三人も子のある母が若い燕と手を取つて、道行をするといふやうな、心得違の婦人もあるやうに、新聞などに見えますが、さういふ人たちの業果こそ、誠に氣の毒の至りであります。又夫唱婦隨は人道でありまして、夫が如何に道理に外れたことを申しても、そのときには只唯々として之に従ひ、事實に於て夫の言行が間違であると思ひましたときには、後にて夫の機嫌の好い

ときを見て、徐に顔色を和げ言語を慎み禮を盡して、其の過誤を諫め正すのであります。よしや夫が罵りませうとも、これに怒りの色を作し罵り返すといふやうなことは、婦人の道ではないのであります。四には、當に夫の教戒を用ゐ、所有の什物を藏匿することを得ざれ。常に夫の教に従ひ、その誠を守つて、如何なることにでも、夫に對し財物その他の事に於て、秘密の行爲は、夫婦間の親密を隔てます原本となりませす。何事をも包まず隠さず、睦じくその日を送ることに心懸けたいものであります。夫婦間に秘密があつてはなりませんから、婦の夫に隠しだてをしてはなりませんのは勿論であります。又夫は男性である丈より賢明でないにしろ、大局に氣がつくものです。又夫は普通戸主權あ

り、年齢も長じて居るのですから、それだけ、婦を教誡する義務がある
のであります。

五には、夫、休息すれば、蓋藏して後に臥せよ。とあります。夫婦が
各々職分に應じて、相共にその日の勤務を了へ、寝むときであります
も、先づ夫を先きに休まして、夜具の世話など致しまして、さてそれか
ら自分が寝むのである。これが妻たる者の務めであると、仰せられたの
であります。

以上、妻の夫に對する務めは、説き方によつては、いろ／＼あります
が、實に簡にして要を得た教訓であるから、三千年の昔の婦人にも、亦
大正の今日以後の婦人にも、適切なる教訓であるのであります。

婦に對する心得

夫と婦と性を異にし、職分を別にして居ても、人間としては同一であ
り、同等の權利を有して居るのであります。かつ夫は男性であり、夫權
あり、或は戸主權あり、或は年齢も多い丈それ丈、本務も比較的重いと
せねばなりません。そこで釋尊は、如何に夫たる本務をお説きになつた
かといふに、矢張り「六方禮經」のつづきに、

一には、出入常に婦を敬すべし。とあります。婦にのみ婦たる道を強
ひましても、夫たる者が、その夫としての道を缺いて居りましては、夫
婦間の平等は失はれ、所謂男尊女卑の弊を生じて、眞の人たる道にはな

らないのであります。それでありますから、釋尊は出ても入つてもいつでも婦を敬せよと仰せられたのであります。敬はいふまでもなく「うやまふ」「大切にすることでありまして、決して「下目に見るな」「輕侮してはならぬ」の御訓戒であります。

二には、之に飲食せしめ、時節を以て衣被を與へよ。と夫婦は異體同心にして、相助け相慰めつゝ協同生活をなすものでありますから、扶養の義務の如きも、必ずしも夫の方にあるのではなくして、双方にあるのであります。されど職分の分業より、婦が家を守り、子女を育てるものとしたならば、之が収入を計ることは、普通の場合に於て、夫側であるものは當然であります。乃ち夫たる者は、その妻の衣食に不自由をかけ

ないやう致す本務があります。無論これは分限相應であつて、又時と場合によりますが、夫たるものは、相應な住居に住み、相應な飲食を與へ、時につるゝ衣服を與へて、人としての禮、人としての實用を缺かさぬやう、致したいものであります。

三には、金銀珠璣を給與すべし。とあります。婦も亦同じ人であるから、男の欲するものは、婦も亦要求するのは當然であります。一家の支出を掌らす以上は、金銀を交付し置くことは當然であります。又婦は特に化粧髪飾を要するものでありますから、夫は自分がさうだからといつて、婦にもそれを強ひないやう。分相應に金銀珠玉を給與するのであります。兎角人は利己主義我儘勝手になり易く、夫婦の不和も又それから

生ずるものでありますから、特に我が強い男子は心得べきであります。

四には、家中の所有は、多少とも悉く之を用ゐて分付せよ。とあります。前に婦の本務をお説きなされた中にも、夫婦間に秘密はない。財物を夫に隠して所有することを戒めになつてありますが、夫も又、一家内の財物は、些しも隠すことなく、婦に之を公示し、婦に與ふべきものは、之を與へて置かねばなりません。

五には、外に於て邪に、傳御を蓄ふることを得ざれ。とあります。既に婦に對して、貞操の保持を確くお戒めになりましたやうに、夫に對しても、家を外に勝手な召使など置くやうなことがあつてはならないと、仰せられてあります。無論家に置いてもいいけないのであります。一夫一

婦の正當なることは、血統の純正の上に於ても、純愛の保持に於ても、家内の和合に於ても、衛生に於ても、經濟に於ても、育兒に於ても、相續に於ても、その他人類の進歩、社會の發展の上に於ても、面白くないことは、今日の學說でも肯定するものであります。それを婦にのみ貞操を強ひましても、その夫たる者が、妾を蓄ふるとか、藝娼妓に戯むるとか、その他、外色に溺れて家を外にするやうでは、どうしてうまく行きませう。

されば釋尊は、以上に於て夫婦とも盡すべき本務を擧げて、之を御明示になつたものであります。今日、所謂新しい人たちの我物顔に唱へます、男女同義の大本を、三千年の昔に於て、お説き示しになつて居る

のであります。終りに「六方禮經」の御經の文句を、そのまゝ左に記して、此の稿を了りませう。

「六方禮經」の金句

「西に向ひて禮拜するは、謂く、夫に事ふるに五事あり。一には、夫、外より來れば、當に起つて之を迎ふべし。二には、夫出で、在れざれば當に炊蒸掃除して之を待つべし。三には、外に姪心あることを得ざれ。夫、罵り言ふも、還りて罵りて色を作すことを得ざれ。四には、當に夫の教誡を用ゐるべし。所有の什物を藏匿することを得ざれ。五に、夫休息すれば蓋藏して後に臥せよ。」

夫の婦を見るに又五事あり。一には、出入常に婦を敬すべし。二には、之に飯食せしめ時節を以て衣被を與へよ。三には、常に金銀珠璣を給與すべし。四には、家中の所有、多少とも悉く用ゐて之を分付せよ。五には、外に於て邪に傳御を蓄ふることを得ざれ。」

親族朋友の心得

相互の心得

人世には夫婦あり、親子あり、兄弟ありて、堅と横とに親族關係が生じ、自ら親しい交際を結ぶことになりす。又血屬とか配遇者の關係とかでなく、或は志を同じうし、勤務を同じうし、境遇を同じうするなどの爲めに、朋友知己の關係が生じます。此等はその相手により、或は尊長もあり、或は同輩もあり、或は目下もあるのでありますが、此等を引つくるめて、親屬とか朋友とか知己とかいつて、特別なる交際上の注

意心得が要るのであります。

一には、親屬朋友知己の中に、悪いことをしようとする人があつたらこつそりと人の居ない所に行つて諫め訓し、呵つて止めさせるが好いのであります。こんなときには、決して誇りやかな顔をせず、その人に同情して、赤誠を以て諫めることが、肝要であります。然るに世間では、なか／＼さう参りません。自他遺憾の至りであります。

二には、親屬朋友知己の間に、病氣したとか、負傷したとか、急用が出来たとかしたときには、奔走趣いて之を救護するのであります。

三には、特に打明け話、内しよ話をしたときには、決して之を他人に漏らしてはなりません。その人は折角信用して、人に言へないことをも

打明けて居るのを、自分丈に包んで居らないで、又人に傳へるといふことは、不徳義の至りでありませぬ。言つてならぬことながら、あなた丈には打明けるから、人に言つて下さらないやうにといつても、それが其の次其の次に傳つては、内しよ話どころではありませぬ。人に話して悪いことは、決して他にいふべきではありませぬ。之を犯すと、發言者の迷惑するは勿論、發言者と他の人とを離間したり、喧嘩怨嗟の原因ともなるものであります。

四には、當に相敬難すべしとなりませぬ。餘りに馴れたりして、禮儀を辨へぬより、相手の感情も害し、衝突も起ります。互に相敬し、相憚らなくてはなりません。兄弟に喧嘩が斷えなかつたら、仲のよい朋友の大

に衝突したりするのは、こゝにあるのであります。

五には、好むところの物は、多少に拘らず、之を分與するが宜しいとあります。交際を温めるには、例へば己が邸内に花見の宴を張るときには之を招くとか、故郷から珍しい菓物が來れば、之を配るとき、何につけ彼につけ、よささうなものは、之を獨占しないで、分與したいものであります。贈答は虚禮若くは爲めにしてはいけません、實意のあるのは、大切なことであります。

以上で凡そ親屬、朋友、知己間の相互の本務を大要説き示されたのであります。例に依り「六方禮經」の金句を左に掲げて、此の章を結びませう。

「六方禮經」の金句

「北に向ひて拜するは、謂く、人、親族、朋友を視るに、當に五事あるべし。一には、之が悪を作すを見れば、私に屏處に往き、諫曉して之を呵止すべし。二には、小に急あれば、當に奔り赴いて之を救護すべし。三には、私語あらば、他人の爲めに之を説くことを得ざれ。四には、相敬難すべし。五には、好む所の物、當に多少たりとも、之を分付すべし。」

主人召使の心得

主従とは何ぞ

立憲政體の今日、國民として眞の御主人と仰ぎまつるは、上に唯一人一天萬乗の大君おはしますのみであります。而も部分的に申しますと官公衙に長官あり、團體に團體長あり、家庭に主人あり、學校に校長あり、商店に店主あり、その他、苟も人が集合するあれば、之を統一主宰するものがあります。こゝに主従といふは、特に使用する者と、特に使用せらるゝ者とのことで、前者を主人といひ、後者を家職店員召使な

どといひ、普通の雇人とは違つて、或一人の特別關係ある勤務者奉公人をいふのであります。されば主人側にも奉公人側にも、又特別の本務心得あり、權利あることは、勿論であります。それを釋尊は、相互的によく教誡されて居ります。

召使に對する心得

主人としては、一に、召使に對し、衣食を不足のないやうに給與し、その生活の安定を保證しなくてはならぬ。

二に、若しそれが病氣にでもかゝつた場合には、その病氣の重い輕いに拘はらず、直は醫師に見せて、その治療を怠るやうなことがあつては

ならぬ。世の中にはよくあることでありますが、達者で働くときには勝手に使ひ、あれをしる、これをしると重寶しながら、病氣にでも罹ると之を追ひ出してしまふ、かういふ行爲があつてはならぬ。

三に、召使に對して、假ひ氣に入らぬことがあつたり、自分の言付に逆ふ行ひがあつても、濫に之を打つたり擲つたりするやうなことがあつてはなりません。之を経文には、搥捶と仰せられてあります。搥は即ち打つといふ字であり、捶は即ち鞭つといふ字であります。何れも使用人の虐待をお戒めになつた言葉であります。一體打擲したりすると、たとひ過失があつても、それで償はれたと、今度は反抗心を増すばかりでありますから、悪いことがあれば、よく諭し導き、將來を誠むる外はない

のであります。

四に、召使といつても、人格人權は同一でありますから、よく之を敬重して、財物の如きも、召使のものを明白に區別し置き、一時の便宜からして、召使の所有物をも取上げるといふやうなことをしてはなりません。のみならず、既に契約してやるといつたものは、たとひ主人側に不利であつても、既得の權利として、契約を果さねばなりません。

五に、二人以上の召使のあつたときには、それ等に分與するものは、それが有形なものであつても、無形なものであつても、公平を旨とし、甲に厚く、乙に軽いといふやうな、依怙最負の沙汰があつてはならぬと仰せられてあります。

これにて、奉公人の心を收攬し、人を使ふの道は、盡されて居ります。今日工場法とか労働法とか、勞資協調とか、いろ／＼やかましく世上で申されて居りますが、主人側と使用人側とが、互に本務を盡したならばそんな問題は起らないのであります。

主人に對する心得

召使側にも、矢張五つの心懸が必要であると仰せられてあります。第一には、朝早く起きて、主人から呼び起されるやうなことがあつてはなりません。人の許に使用人として働いて、その將來に大をなさうと心懸けてゐる人は、たとひ只今の境遇が何であらうとも、自分から僻んで、

卑屈な考へに落ちるやうなことがあつてはならないことは、申すまでもありません。世の中には、小僧から長老はないのであります。不出世の英雄も、その初めは獨りて歩けぬ嬰兒であつた如く、末は大海に注ぐ漫たる水も、一時は木の葉の下を潜らねばならぬ、運命に置かれます。それでありますから、今、人に使はれて居るといつても、頓ては人を使つて通らねばならぬときが参ります。それ故、朝でも主人から起されて初めて起きるといふやうなことがあつてはなりません。必ず早く床を蹴つて起き、主人の命を待つべきであります。

第二には、當に爲すべきところは、自ら心を用ひてせねばなりません。主人の命ぜられた仕事に就いては、十分の注意を以て、之に當り、決して

て好い加減のことをして、主人の眼を眩すといふやうなことがあつてはなりません。

第三には、主人の物を大切にし、妄に人にやつたり、僉末にしてはいけません。どうせ自分のものではないと、主人の物を粗末にしたり、勝手に人々にくれたりするやうな不謹慎のことがあつてはなりません。主人の利益は自分の利益であると思つて、誠心誠意、事に當ることが肝要であります。主人を思ふことは、自分を思ふが如く、主人の仕事は、自分の仕事の如くに、そして主人のものは自分のものの如くに、大切にせよとの御教訓であります。

第四には、主人の出入には、當に送迎すべきであります。主人の出入に

送り迎へすることは、何でもないことのやうに思はれますが、そこに使用人の主人に對する美しい感情の表はれがあり、使用人たる者の大切な禮儀の一つであります。

第五には、主人の美しいことを稱め譽げて、決して悪口などいつてはなりません。主人に反抗したり、陰口を利くやうな使用人は、その將來に於て大成するといふ素質が薄いのであります。

以上で主従兩方面の本務は説き盡されてあります。その「六方禮經」の本文を左に記して、此の章を了へませう。但し經典には主人のことを大夫といつてあります。

「六方禮經」の金句

「地に向ひて拜するは、謂く、大夫として奴客婢使を視るに、亦五事あり一には、當に時を以て飯食せしめ、衣被を與ふべし。二には、病瘦には當に醫を呼びて、之を治せしむべし。三には、妄に之を搥捶することを得ざれ。四には、私の財物有らば奪ふことを得ざれ。五には分付の物は當に平等なるべし。」

奴客婢使の大夫に事ふるに、亦五事あり。一には、早に起きて大夫を呼びしむること勿れ。二には、當に作すべき所は、自ら心を用ゐて之を爲せ。三には、當に大夫の物を愛惜すべし。乞巧の人に棄捐するこ

とを得ざれ。四には、大夫の出入には、當に之を送迎すべし。五には、當に大夫の善を稱譽すべし、其の惡を説くことを得ざれ。」

僧侶信徒の心得

沙門道士、凡民とは如何

沙門は梵語で勤息と翻し、凡俗を超越して安心立命を得、人に善を勤め行はしめ、惡を息め避けしむるもの。道士とは道を悟り、道を教ふる士のことであります。凡そ人の世に立つ、各々特能あり職分あり、互に助け合つて生活をして居るのでありますが、常に煩惱に苦しめられ、物事に到惑することがありますので、先覺の士、修養ある人が、之が指導者となり、扶助者となつて、常に之を導き、和げ、安んぜしめるのであ

ります。その教化側、指導側の人を沙門道士と稱し、今日の所謂宗教家傳道者僧侶教導職牧師に當るのであります。沙門道士の責任の重大にして、又一般求道者信徒の之に對する本務の輕かぬものがあります。これに釋尊は、この兩者の本務心得をお説きになつて居ますから、左に之を掲げませう。

求道者信徒の心得

一には、善心を以て之に向ふ。人は受け難き人身を父母に依つて與へられ、立てば歩めと成長し、父母教師の教育に依つて、身心とも一人前になるのであります。けれども眞の靈魂の救濟、安心立命は、通常之を

僧侶傳道者より得るのであります。即ち自己の出離解脱を求め、教を聞き道を求めますには、冷しや冗談半分の不眞面目の心を以て、傳道者に對してはなりません。傳道者に對しては、極めて虚心坦懐、無邪氣眞面目の心を以て向ひ、その説く道を、疾く了得することに努めねばなりません。

二には、好言を擇んで之と語れ。とあります。此方は道を求め、教を受けるのでありますから、謙遜にして敬虔の念深く、禮儀を重んじ言語を慎んで、傳道者に對するやう、致さねばなりません。

三には、身を以て敬せよ。とあつて、常に心に之を敬重し、和悦せる言葉を用ゐるのみならず、態度身體を以て敬重し奉仕することを忘れて

はなりません。それを面白半分おもしろはんぶんに對するやうでは、傳道者でんどうしゃに無禮ぶれいなるばかりか、道を信得しんとくするなどのことは以ての外ほかであります。自ら傳道者でんどうしゃを侮あなごれば、目的の道みち、教をしへないがしも蔑ろあなごにすることになります。故に身を以て之を敬重けいじゆうし、實行じつかうの上に赤心せきしんを表現へうげんせねばなりません。

四には、當に之を戀慕れんぼすべし。とあります。求道者きうどうしゃ即ち信者側しんじやがはは、傳道者でんどうしゃ即ち僧侶宗敎家そうりよしゆうけうかを、身口意共しんくういごもに、之を敬重けいじゆうするのみならず、恰も子の父母ふぼを慕したふが如く、婦の夫つまを戀をっこふるが如く、之を戀慕れんぼして已まない、赤心せきしんがなくてはなりません。

五には、沙門道士しゃもんどうしは人中じんちゆうの雄ゆうなり。當に恭敬承事きやうけいじやうじして渡世たせの事を問ふべしとあります。傳道者宗敎家でんどうしゃしゆうけうかは、最も神聖しんせいな職掌しやくしやうで、多くの人の教

化者救濟者くわしやきゆうさいしやであるから、よく敬うやまひよく仕つかへ、人生じんせいの歸趣きしゆ、處世しよせいの大道だいたうを之これに問とうて、我等われらが此この世よに生せい在ぜんして居をるところの意義いぎを明あきらかにし、何なんの爲ために生うまれて來きたのであるか、何なんの爲ために生せい存ぜんし、何なんの爲ために食くひ、何なんの爲ために働はたらかねばならぬのであるか、其その根本こんぽんを窮つきめ盡つくさねばなりません。弟子でし信徒しんじゆ共ごもは、常つねに恭敬きやうけいの心持こころもち言語舉動げんごきやうどうをし、傳道者宗敎家側でんどうしゃしゆうけうかがはによく仕つかへ、よく外護げごし、その衣食住いしょくじゆうを安やすんぜしめつゝ、徹底てつてい的に生活くわつじやう上の事こと、出世間しゆつせけんの事ことを聽きき、心智しんちを開發かいはつし、如來にょらいを信仰しんかうし、安心立命あんしんりつめいを得なければなりません。

傳道者僧侶の心得

さて沙門道士、即ち傳道者宗教家僧侶の地位に立つて居ります者には六意を以て凡俗を教化する方針を示しになりました。六意とは、梵語で六波羅密、漢譯して六度といひ、凡夫の此の岸より、佛陀の彼の岸に渡る唯一の方法であつて、而も相互ひが世の中に處する上に、必要なる事項であります。

一には、之に布施を教へて、自ら慳貪なることを得ざれ。とあります。布施は之を三大別すると、財施と法施と無畏施とに分けます。財施は有形の施、法施は無形の施、無畏施は、人の害を除く施であります。今日でいふ社會救濟事業等、保護その他に相當するのであります。財施は人に物を施して恵むこととあります。相互は世の爲め、人の爲めになるやう

と心懸け、慈悲同情を以て、世渡をするやうに教ふべき事とあります。これと同時に、かく教へるからは、傳道者自身は、特に自ら物を施すのを惜んだり、法に外れた貪りをするやうな心を起すなど、お戒めになりました。

二には、之に持戒を教へて、自ら犯すことを得ざれ」とあります。持戒とは、五戒十戒など、持つこととあります。十戒とは、一に不殺生戒、二に不偷盜戒、三に不邪淫戒、四に不忘悟戒、五に不兩舌戒、之に不惡口戒、七に不綺語戒、八に不慳貪戒、九に不瞋恚戒、十に不邪見戒といひ、身にも口にも意にも悪いことをしないといふこととあります。已に人は悪いことをしてはならぬと教へるからは、自身は因より、此等の惡

い事をしない、戒律を犯すことをしないやうにせねばならぬのであります。

三には、之に忍辱を教へて、自ら悲怒することを得ざれ。と、あります。現在の世の中のことを、娑婆といひますが、之を漢譯しますと、忍士といひます。それは此の世は、お互に耐へ忍ばねばならぬ。何事も辛抱が第一であります。短氣は損氣であります。それはくく氣に入らぬこと、大なり小なり辱めを受けることもありますが、それを能く忍ばねばなりません。かう人に教へるからは、自らも辛棒強くして、腹を立てるといふやうなことがあつてはなりません。

四には、之に精進を教へて、自ら懈怠なることを得ざれ」と、あります。精進とは魚肉を喰べぬことではなくして、精を出し勵みて、向上進歩すること、今日の語でいへば、勉強のことです。善の道に傍目も振らずに精出し、毛頭怠つてはならぬことを教へ込みます。已にさる人の教へるからは、自分では横着であつたり、佛の道を怠り惰けるやうなことがあつてはなりません。

五には、之に一心を教へて、自ら放意なることを得ざれ。とあります。人は何事にも一心であつて、そはくしてはいけぬ。心を一所に落着けてあわてゝはならぬのであります。禪定にあつて心を散亂してはなりません。と教へながら、自分は心の駒を走り廻らせ、落着がないやうではいけません。

六には、之に點慧を教へて、自ら愚痴なることを得ざれ。とあります。人は自分を知り人を知り、物事を知つて、聰明でなくてはならぬと、智慧をつけながら、自らは、暗鈍である、愚痴であつてはならぬといふのであります。

以上傳道者たるものの心得を懇々と説きになりました。身を以て人を率ゐ、人格を以て他を教化するといふ立場に居る人は、如何に口先で巧みに説いても、以上の六の佛説を守ることの出来ないものは、到底、人を感化し、出離解脱せしむる大役は、果すことは出来ません。今日の宗教家僧侶なるものの、日常忘れてはならぬ金科玉條であります。

以上の二者の本務心得を説いてある「六方禮經」の金句を、左に掲げ

て、此の章を了りませう。

「六方禮經」の金句

「天に向ひて拜するは、謂く、人の沙門道士に事ふる、當に五事を用ふべし。一には、善心を以て之に向へ、二には、好言を選んで與に語れ。三には、身を以て之を敬せよ。四には、當に之を戀慕すべし。五には、沙門道士は人中の雄なれば、當に恭敬承事して渡世のことを問ふべし。沙門道士は、當に六意を以て、凡民を視るべし。一には、之に布施を教へて自ら慳貪なることを得ざれ。二には、之に持戒を教へて、自ら犯すことを得ざれ。三には、之に忍辱を教へて、自ら恚怒することを得ざれ

四には、之に精進を教へて、自ら懈慢なることを得ざれ。五には、之に一心を教へて、自ら放意なることを得ざれ。六には、之に黠慧を教へて自ら愚痴なることを得ざれ。」

六方禮經の結言

道を教へらるゝ恩深し

佛説六方禮經に於ては、長者の子尸迦羅越が父の遺命に依り、毎朝身を淨めて東南西北天地の六方に禮拜するに、それ／＼甚深の意味をつけて、有ゆる人世の善を教へ、且つ出離解脱の要道をも教へられたのであります。沙門道士、即ち傳道者は、人を教へ導いて惡を去つて、善をなさしめ、正しい所の道を開きまして、眞に活きがひあるやう誘導せらるるところのお方であるから、その恩に父母主君の恩にも勝る位であります。

す。故にその教へを受ける者は、謹んで之を敬ひ、赤心を傾けて、その教に従はなければならぬと仰せられた。若し管に父母が生み落したばかりであつて、人としての道を知ることが出来なかつたならば、それは鳥や獸と、餘りに距離がないものとなつてしまふのであります。この世に生れて斯の道を聞かして頂くといふことは、非常に悦ばねばならぬことであります。人身は享け難く、佛説には遭ひ難いのであります。今、父母の恩に依つて、享け難い人身を受けさせて頂くことが出来、沙門道士の力に依つて、遭ひ難いところの佛法に會して頂くといふことは、誠に有り難いことと思はねばなりません。承陽大師のお言葉にも、「此の身今生に度せざれば、夫れ何れの世にか度せん」とあります。決して安閑と

して居てはなりません。

尸迦羅越の満足

釋尊は斯の如くに、尸迦羅越に説法なさいまして、下の如く仰せられた。

「かういふ道徳を知つて、汝の父が示し遺した六方に向つて禮拜してこそ、眞に六方禮拜の意義が生ずることとなつて來るのである。」
以上、長者たる心得、朋友の選び方、親子、師弟、夫婦、親屬朋友、主従、傳道者、求道者の各本務心得を知り、よく之を守つて行けば、何事も不足はないと、お示しになつたのであります。

長者の子の尸迦羅越は、その教へを受けまして、感謝恭敬の念禁じ難く、直に戒を受けて、佛のお弟子となつたといふことであります。

「六方禮經」と新道德

以上は六方禮經に依つて、先徳の記されたのを参考として、皆様の御参考の爲めに申上げたのでありますが、誠に短い釋尊の教へであります。が、お互ひが日常生活して行きます指針は、悉く此の中にあるといつても、決して過言ではないのであります。如何なることを道德の標準として行くべきか。といふ新道德樹立の聲を前にして、萬古に貫通する大眞理を藏せる、釋尊の人道の大本に對する高見を紹介することは、又

意義のあることと信ずるのであります。

最後に、以上「六方禮經」の結言の文字を、左に記して、これを了ることとします。

「六方禮經」の金句

「沙門道士は、人を教へて、惡を去り善を作さしめて正道を開示す。恩父母より大なり。斯の如く之を行はゞ、汝が父の在せしときの六向拜の教へを知ると爲す。何ぞ富まざるを憂へん。尸迦羅越即ち五戒を受け禮を作して去りにき」

以上にて六方禮經を結了しました。一體は、前述來の九章を一篇として掲げたかったのでありますが、便宜上、一章づつ切放しました。併し經典は、章の順序になつて居りますから、その積りでお読み下さいまし。

度胸の据ゑ方終

不復許製
 大正十五年十一月五日印刷
 大正十五年十一月十日發行

編者	井上久太郎
發行者	増田義一 <small>東京市京橋區南紺屋町十二番地</small>
印刷者	猪木卓二 <small>東京市麹町區飯田町二丁目五十番地</small>
發行所	東京市京橋區南紺屋町十二番地 實業之日本社 <small>電話京橋(五六)五一二二番 飯田口座番號三二六番</small>

東京社印刷所印刷

度胸の据ゑ方
 定價壹圓五拾錢

青年出世訓

定價貳圓
郵稅拾貳錢
中型上製函入

大阪朝日新聞曰く

處世の要訣として一般青年が先づ志望を選定し、自己の特長を生かし世の中に
出て遭遇するあらゆる人事の問題に對して心得べき事柄などを懇切に講述した
もので、説く所公正穩健世の一般青壯年のため座右の寶典たり得る好著である

- (部一の容内)——
- 特長を涵養せよ……………
 - 人格第一主義……………
 - 下風に立つ雅量……………
 - 熱誠の偉力……………
 - 情氣を一掃せよ……………
 - 青年と品行……………
 - 青年と感激……………
 - 意志の鍛鍊……………
 - 眞劍味の偉力……………
 - 運命の開拓……………
 - 時代思潮と青年……………
 - 學生と思想問題……………
 - 現代青年と新思想……………
 - 地方青年の天職……………
 - 世の中へ出てから……………
 - 青年出世の準備……………
 - 自己開發に勉めよ……………
 - 青年と結婚問題……………
 - 青年と煩悶の豫防……………
 - 現實に囚はるゝ勿れ……………
 - 青年と時俗超越……………
 - 自己正視を怠る勿れ……………
 - 人を引き附ける力……………
 - 反抗心の善用と悪用……………
 - 注意す可き首の振り方……………
 - 興奮抑制と沈着冷靜……………
 - 自發的克己の修養……………
 - 男らしき態度……………

長社本日之業實
著一義田增

青年と修養

定價壹圓五拾錢
郵稅六錢三六分
總ヶロリス函入

青年の心を支配する凡百の煩悶憂惱に對し、最も明快にして適切なる解答を與ふる
ものは、恐らく著者を外にして他に無からん。本書は最も多く青年に接し、又最も
多く青年に同情と親切とを有する著者が、多年の體驗により青年の針路を示せるも
の、青年自らの必讀書たるのみならず、亦父兄、教育家、先輩諸士の良參考書。

- (部一の容内)——
- 會社の寶と稱せらるゝ青年……………
 - 不心得な主人に感心な店員……………
 - 常識の修養法……………
 - 結婚問題に煩悶する青年……………
 - 職業の選定法……………
 - 自己缺點矯正法……………
 - 卒業生就職の用意……………
 - 意志は如何にして……………
 - 鞏固にすべき乎……………
 - 膽力は如何にして養成……………
 - すべき乎……………
 - 使用人昇進の秘訣……………
 - 青年の模範……………
 - 青年の修養……………
 - 青年と煩悶……………

長社本日之業實
著一義田增

立身の基礎

版四十二
定價貳圓貳拾錢
郵稅拾貳錢
中型 上製函入

本書は先づ各人共通の缺點を指摘し、其矯正法を説き、進んで立身出世に必要な修養を各方面から縷述し、世に處し人に對する態度を教へ、東西古今の實例を擧げて具體的に懇説してゐる。

長社本日之業實
著 一 義 田 増

—(部一の容内)—

- | | | |
|--------------|-------------|-----------------|
| 弱點の矯正…………… | 注意力の養成…………… | 自己完成…………… |
| 粗放の矯正…………… | 應用力の修養…………… | 變に處する道…………… |
| 嫉妬心の矯正…………… | 綜合力の養成…………… | 失敗に處する態度…………… |
| 近視慾の矯正…………… | 獨創力の涵養…………… | 刺戟に對する心の態度…………… |
| 良心の賣買…………… | 大才の修養…………… | 縁の下の力持…………… |
| 輕信の危険…………… | 英氣の涵養…………… | 個性の發揮…………… |
| 煽動に乗る人物…………… | 彈性の養成…………… | 境遇を支配せよ…………… |
| 自信力の養成…………… | 進歩的人物…………… | 投機の危険…………… |
| | | 實行は最後の勝利…………… |

長社本日之業實

著 氏 一 義 田 増

思想善導の基準

版八十
定價一圓五十錢
郵稅八錢四六判

著者常に我が帝國の現状を慮り、思想の動搖を憂ふること切なり。茲に椽大の筆を振ひ、世の青年諸君の迷夢を醒まし、其歸趨を知らしめんがため本書を成す。所説急激に流れず、保守に失せず、歐米の大勢に鑑み、我が國情を顧み、而も新時代に順應すべき健全なる思想を鼓吹す。

大國民の根柢

版二十
定價一圓八十錢
郵稅十錢四六判

大國民たるべき大常識の修養を述べ、人格涵養の要義を縷説し、島國根性の弊害を論じ、偏狹固陋なる頑冥思想より脱して眞に世界を友とし、全人類に活眼を注げる大國民的品性の修養を力説し、正大雄渾の氣象全卷に溢る。

士博學法・士博學農

新渡戸稻造氏著

縮
刷

修 養

版八十百

定價壹圓五拾錢
郵稅六錢三六判

識古今に亘り徳一代に冠たる博士が、五十餘年の學問経験を傾け滿腔の熱血を注いで品性、人格、處世法に亘りて懇説せられたるもの。其説明の親切なる、其材料の豊富にして趣味深き、淡々として盡きざる天泉にも比すべし。
一度これを讀みかば明鏡に向ふが如く、忽ちにして自己の歸趨を自覺し向上發展の道を體得し得べし。蓋し古今獨歩の名著にして萬人必讀の活經典なり。

縮 世 渡 り の 道

五七十
版十

定價壹圓五拾錢
郵稅六錢三六判

日 修 訓 養 一 日 一 言

五八十
版十

定價壹圓貳拾錢
郵稅四錢三五判

士博學法

浮田和民先生著

生 活 戰 術

版二十廿

定價壹圓五拾錢
郵稅六錢三六判

自己の長短を知り、従つて自己の使命を知る時は、才能の優劣如何に拘はらず、萬人悉く成功せんこと難きに非ずとは、『生活戦術』に於ける著者の信条にして、生活戰場に勝利を得るの根本要素は即ちこゝに在りとなし、『處生學』、『生活競争の新戦術』組織的の協力、『科學的努力』の四章に大別して、縱横論議せられたるもの、附録として『讀書法』以下三篇を載す。新時代に處すべき青年諸君の處世鑑たり。後者は『生活戦術』の姉妹篇にして著者獨特の處世哲學より人生の戰場に勝利を得る主觀的側面を専ら力説したものである。現代青年の必讀すべき活文字。

勝 利 へ の 路

版三十

定價壹圓七拾錢
郵稅八錢三六判

賜 攝 政 宮 御 台 覽

如何にして
希望を達す可きか

四十六版
定價一圓七十錢
郵稅十錢
四六判上製

上 谷 續 氏 著
上 谷 續 氏 譯

マーデンの二大雄編の全譯書。前者は希望達成の方法を述べ後者は職を選むに當りての實際的問題を攻究す。いづれも青壯年者第一關心事たるべき一身上の問題にして歐米に於ては非常なる好評のもとに數百版を重ねたる成功心理學的名著にして、我社より其全譯發行日ならずしてこの好評を得て重版に次ぐに重版を以てす。以つて本書の價值を知られよ。

如何にして
一身の方向を定むべきか

十定價二圓
九郵稅十錢
版四六判上製

マーデン博士著 後藤新平閣下題字
上谷 續先生譯 尾崎行雄閣下序文

如何にして
自己を大成す可きか

忽三版
定價壹圓七拾錢
郵稅拾錢四六判
總布上製函入

如何にして自己を大成すべきかは、自己完成の最後の目的であり、青年にとつて亦最も必要なる修養である。本書はマーデン博士の三部作たる「如何にして希望を達すべきか」「如何にして一身の方向を定むべきか」「如何にして自己を大成す可きか」の最後の雄篇にして、前二書の讀者は勿論、初めて本書を手にとせられたる者にも不可思議なる靈的助力を與へるものである。

(目略容内)

何故好んで萎縮せんとするか
人生の最大問題……………
大望をそゝる環境……………
衝動……………

力は内に潜む……………
自己批評難……………
人皆大我あり……………
心中に睡れる巨人……………
醒めたる巨人の力……………

亞米利加病の療法……………
産業に油をさせ……………
能く勵み能く遊べ……………
道は近きにある……………

如何にせば運命を支配し得るか

三 定價貳圓
郵税十錢
版 中型布製函入

著スムルホ・ルエ・フエ

補譯氏春雅口谷

本書の原著『The Law of Mind in Action』は英米兩國より出版され、彼地に於て精神療養上の教科書として已に定評あり。『吾等心を持つ！故に心の所現たる境遇財産健康や周圍の人々は吾等にとつて外物でない、心のまゝに支配し得るものである。』と彼は喝破してゐる。絶望、懊惱、病弱、貧苦の淵に沈める者一度此の書を読まば、直ちに希望の光明を與へられ、生命の泉を與へられ、つひに勝利の道を歩む勇者の力を獲られる。

—(目略容内)—

心の法則……………
理想の力……………
一念不動……………
神と人……………
靈に就いて……………

運命を呼ぶ法則……………
直覺力の養成法……………
想像の創作方……………
勇氣を失ふ勿れ……………
恐怖不幸災禍の原因……………

個人の心—創造者……………
宇宙の心—創造者……………
人間—地上の主……………
運命を支配する武器……………
運命の選擇について……………

建國の精神に還れ

忽 定價五拾錢
十 郵税六錢
版 菊判並製

長員委國建
長市京東前
著氏郎次秀田永

我國建國の理想とは何か？ 著者曰く、物質文明を偏重することの如何に危
建國の趣旨は如何？ 險にして悲惨なるかは、世界大戦争が遺憾なく
之を證明した。空想的理論が遂に、人類の實際生活に適合せざる事は露國其他の現狀
が雄辯に之を説明した。
今や世界を通じて空想より現實に赴き、國際的より著しく國家的、民族的となつて來
た。我々は最早や醒めなければならぬ。そして東洋の精神的文化の眞價値を考へ、第
一に自己及び自己の國家を反省して見なければならぬ、遠く野外に梅を探るの愚を捨
てて、先づ國內の枝頭に十分なる春を賞すべきである。天外聲あり、建國の精神に還
れ！我々の進むべき道は、高明なる建國の精神を現代化するにあるのである。現代の
思想に適應せる、透徹せる理解を以て我國體を擁護するにあるのである。

陸軍中將子爵 前樞密顧問官 觀樹三浦梧樓閣下述・熊田葦城氏著

觀樹將軍縱橫談

三 定價 貳圓
版 郵稅 八錢 四六判

觀樹三浦將軍は維新の功臣にして政界の巨星、民間の元老として、政局の變轉、内閣の更迭に當り、毎々其の裏面に關與せざるはない。將軍を知らずして政界の真相を語る事は不可能である。本書は先輩知人に關する懷舊、感想、批評、月旦にして、痛快骨を刺し、戲謔を解き將軍の意氣面目眼前に躍如たるもので將軍の性格を窺ふに足るものである。

軍醫總監子爵 樞密顧問官 石黒忠愷閣下著

耄錄

六 定價 壹圓五拾錢
版 郵稅 八錢 四六判

德富蘇峰氏曰く―翁は世の表も裏も知り抜いた通人、人間萬事通曉せざる無く、其の趣味や廣汎、智識や該博、但し天下の名醫として診を見ざる事久し―今や久しき沈黙を破つて本書を公刊す。寔に萬人必讀の活文字！曩に天下の視聽を集めし「況翁閑話」の續編である。

前東京高等商業學校長 坪野平太郎先生著

叱牛錄

五 定價 貳圓中型
版 郵稅 拾錢 函入

男爵 阪谷芳郎先生序 法學博士 添田壽一先生題

「坪野君は明治九年以來の親友にして、愛國の志篤き人。不幸病身で大學卒業後外務遞信方面に活動を試みしも宿痾の爲め驥足を延ぶるを得ず、後懇望せられ高商學校長として令名を馳せられたが、之も病のため驟て退かれた。にも拘はらず六十七歳の長壽を保たれたは、全く君の熱心なる信仰より得たる大悟徹底の力に歸する」とは同窓の親友阪谷男の其の序文の中に云へる所、以て著者の人格と信仰とを知るに足る。

- (表一次目)
- 大聖出づ……………
 - 不動心……………
 - 大死一番……………
 - 何ぞ大將學を學ばざる……………
 - 青年學生今昔觀……………
 - 將帥の器……………
 - 短氣短命……………
 - 辛抱の仕方……………
 - 難助七節……………
 - 貧乏哲學……………
 - 金が欲しいかな……………
 - 貧人と賤人の別……………

エト 8N 82

永平寺前管長
日置黙仙禪師述

鍊
膽
術

第五十三版

定價七拾五錢
郵稅四錢三六分
二五八頁美本

膽成る所其處に大智略出で大勇氣起り、大人格備はり大威嚴發し
事に處して泰然自若たり。膽成る所其處に現世の境を超脱し、凡
ゆる煩悶快惱の迹を絶え、迷夢妄想を一掃し、事を處理すること
猶ほ快刀の亂麻を絶つが如し。俗塵の外に逃れて深く禪機の堂奥
に徹底し、而も飽くまで人間としての愛に燃えたる著者が、其の
心膽より迸出する大喝は、以て現代式輕薄才子者流をして戰慄せ
しむるに足る。實に尊き文字である。

終